

## サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド

——一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容——

守川 知子

【要約】一五〇一年、イランではシーア派信仰を掲げるサファヴィー朝が成立し、イランにシーア派化の問題を投げかけた。しかしながら、実際にはどのような過程を経てシーア派化が進行し、当時の社会はどのような状況変化の影響を受けたのであろうか。本稿では、以上の如き問題関心から、シーア派化の先駆けともなるシーア派聖地マシュハドに焦点をあて、この聖地に対してサファヴィー朝政権の行った諸政策、及び都市の有力者層の変化を検討する。その結果、シーア派政権と二イマーム派シーア派ウラマーを中心とした有力者層が連携して都市のシーア派化を促進したことが明らかとなると同時に、サファヴィー朝シーア派信仰の特徴である呪詛行為が、イランのシーア派化に際し問題となり、マシュハドにおいてはスンナ派政権シャイバーン朝による一六世紀末の大惨事の主因となったことが指摘されるのである。

史林 八〇巻二号 一九九七年三月

### はじめに

イラン東北部のホラーサーン州に位置するマシュハド Mashhad は、第八代イマーム、アリー・アッリダー（ペルシア語ではレザー）(Ali b. Musa al-Rida (八一八年没)の殉教地である。この地は彼の墓廟（以下、レザー廟と呼ぶ）を中心に発展し、今日では多くの参詣者が訪れるイラン最大のシーア派聖地となっている。

今日のマシュハドの発展の礎は、一般に、シーア派を国教として採択したサファヴィー朝（一五〇一—一七二二）にあるとされているが、これまでのところ、サファヴィー朝期のマシュハドを扱った本格的な研究は全くと言ってよいほど為さ

れていない。<sup>①</sup>しかしながら、サファヴィー朝成立当初（一六世紀）のマッシュハドは、サファヴィー朝研究史上の問題、特にイランのシーア派化を考える上で、極めて重要な考察対象となることは疑い得ない。

本論に先立ち、一六世紀のマッシュハドの政治状況を確認しておこう。サファヴィー朝成立後の一六世紀初頭、それまでスナナ派政権のティムール朝支配下にあったマッシュハドは、サファヴィー朝とウズベク族のシャイバーン朝（一五〇〇—一五九九）のホラーサーンを巡る攻防に巻き込まれ、数年ごとに両政権の支配を交互に経験した。<sup>②</sup>一五三二年にウズベク軍が撤退すると、その後半世紀の間、この地はサファヴィー朝が支配したが、一五八八年には、シャイバーン朝の君主 'Abd Allah Khan がヘラート征服後に侵攻し、翌一五八九年、マッシュハドを占領、以後十年間支配した。

一六世紀のマッシュハドの政治状況は上述の如くであるが、一六世紀の初頭と一六世紀の末で、シャイバーン朝のマッシュハド占領時の対応は大きく異なっている。一六世紀初頭には、シャイバーン朝君主 'Ubayd Allah Khan は、この聖地を征服するに当たって、マッシュハドの軍人階級であったキジルバーシユのみを殺害し、聖地の住民に対しては何ら危害を加えることなく、征服後、有力者の土地税をも軽減した。<sup>③</sup>さらに 'Ubayd Allah Khan や先の君主でありシャイバーン朝の創設者である Shaybani Khan らが、シーア・イマームの墓廟であるレザール廟に参詣していたという事実も指摘されている。<sup>④</sup>

しかし、一六世紀末の侵攻時には、シャイバーン朝下のスナナ派ウラマーはマッシュハド住民に対して次のようなファトワーを送付した。

醜悪なるシーアの集団が行い述べていることは風聞によって明らかであるように、イスラームと信仰の民の範疇から外れてしまつてゐる。……不信心者たちを殺害し、彼らの財産を略奪し、庭園や耕地や家屋を焼きつくし荒廃させることは認められている。

[Abbas, I: 191]

ウズベク軍はこのファトワーに基づいてマッシュハドに侵攻し、まずキジルバーシユ軍と戦った。そしてレザール廟に逃げ込

年表—16世紀のマシュハド

| マシュハド関連の出来事  | マシュハドのハーキム   |
|--|--|
|  | 1500 [T] Muḥammad Muḥsin Mīrzā                               |
| 1508 Shaybānī Khān による征服   | 1508 [U] Sayyid Hādī Khwāja                                  |
| 1509 Shaybānī Khān, レザー廟参詣   |  |
| 1510 Ismā'il, ホラーサーン遠征の途上で征服, レザー廟参詣                                   | 1510 [S] Aḥmad Beg Ustājilū                                  |
| 1512 Aḥmad Beg, 対シャイバーン朝遠征に参加  | 1512 不在  |
| 1513 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, 住民は進んで服従<br>Ismā'il, ホラーサーン遠征にて奪回          | 1513 [U] 'Ubayd Allāh Khān<br>[S] Aḥmad Sulṭān Afshār ?      |
| 1524 Ismā'il 死去, Ṭahmāsp 即位  | 1522 [S] Būrūn Sulṭān Takkalū                                |
| 1525 Būrūn Sulṭān, 宮廷に赴き, 翌年戦死   | 1525 (息子に委ねる)  |
| 1526 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, 数カ月の包囲の末征服                                 | 1526 [U] Chaghatāy Bahādūr                                   |
| 1528 Ṭahmāsp の第1次ホラーサーン遠征によりウズベク軍<br>撤退, Ṭahmāsp, レザー廟参詣               | 1528 [S] Āghziwār Sulṭān Shāmlū                              |
| 1529 'Ubayd Allāh Khān が再度征服, 数百人のキジルバー<br>シユを殺害, 'Ubayd Allāh, レザー廟参詣 | 1529 [U] ?   |
| 1530 Ṭahmāsp の第2次遠征によりウズベク軍撤退<br>Ṭahmāsp, レザー廟参詣                       | 1530 [S] Mantashā Sulṭān Ustājilū                            |
| 1531 ウズベク族のアミールたちの侵攻<br>Mantashā Sulṭān, 撃退後宮廷に召喚される                   | 1531 [S] ?   |
| 1532 'Abd al-'Aziz Khān Uzbek が数千騎のウズベク軍と<br>駐留, Ṭahmāsp の第3次遠征を聞き, 撤退 | 1532 [U] 'Abd al-'Aziz Khān<br>[S] Shāh Qulī Sulṭān Ustājilū |
| 1534 Ṭahmāsp, レザー廟のドームを改修  | 1534 [S] Šūfiyān Khalīfa Rūmlū                               |
| 1535 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, Šūfiyān Khalīfa の妻子が<br>防衛                 | 1535 (息子に委ねる)  |
| 1536 'Ubayd Allāh Khān は征服を企図するも, Ṭahmāsp の<br>進軍(第4次遠征)を知り撤退          |  |
| 1537 Ṭahmāsp, 遠征の帰路, レザー廟にて誓願  | 1537 Ya'qūb Sulṭān Ustājilū                                  |
| 1540 'Ubayd Allāh Khān 死去  |  |
| 1544 ムガル朝の Humāyūn, レザー廟参詣   | ? Shāh Qulī Sulṭān Ustājilū <sup>b)</sup>                    |
| 1545 Dīn Muḥammad Khān Uzbek の侵攻, 数十日で撤退                               |  |
| 1549 Bahrām Mīrzā の遺体をレザー廟に埋葬<br>Parī Khān Khānumら, 宮中の女性がレザー廟参詣       | 1551 'Alī Sulṭān Dhū al-Qadr                                 |
| 1555 アマシヤの和議   | 1555 Ḥasan Sulṭān Rūmlū                                      |

|      |   |      |   |
|------|---|------|---|
| 1557 | Sulṭān Muḥammad Mīrzā, レザー廟参詣<br>ホラズムのスルタンら, レザー廟参詣   | 1556 | Sulṭān Ibrāhīm Mīrzā<br><Aḥmad Sulṭān Afshār>   |
| 1558 | Sām Mīrzā, レザー廟参詣   |      |   |
| 1562 | Sām Mīrzā, マシユハド統治を要望<br>Sulṭān Ḥusayn Mīrzā, レザー廟参詣  | 1563 | Ṭīr Ghayb Sulṭān Ustājīlū   |
| 1564 | Ṭīr Muḥammad Khān Uzbek が侵攻するも帰還<br>近郊に侵攻した 'Alī Sulṭān Uzbek を撃退   | 1566 | Sulṭān Ibrāhīm Mīrzā  |
| 1567 | 'Abd Allāh Khān Uzbek のホラーサーン侵攻   | 1567 | Shāh Walī Sulṭān Dhū<br>al-Qadr   |
| 1571 | マシユハドの王子ら, 宮廷に召喚される   | 1574 | Walī Khalīfa Shāmlū   |
| 1576 | Ṭahmāsp 死去, Ismā'il II 即位<br>Ṭahmāsp の遺体をレザー廟に埋葬  | 1576 | Murtaḍā Qulī Khān Pumāk<br>Turkmān  |
| 1577 | Ismā'il II 死去, Sulṭān Muḥammad 即位   |      |   |
| 1578 | Ismā'il II に殺害された王子らの遺体をレザー廟に埋葬<br>Jalāl Khān Uzbek の侵攻, Murtaḍā Qulī が撃退                                       |      |   |
| 1580 | 'Alī Qulī Khān Shāmlū, Murshid Qulī Sulṭān Ustājīlū<br>らの侵攻, 数カ月間の包囲の後撤退  |      |   |
| 1581 | 'Alī Qulī Khānらの侵攻, マシユハド荒廃   |      |   |
| 1583 | Sulṭān Muḥammad と Ḥamza Mīrzā, レザー廟参詣<br>Murshid Qulī Khān が統治権を Salmān Khān から奪<br>取, 'Abbās の名でフトバを詠み, シッカを発行 | 1583 | Salmān Khān<br><Shāh Qulī Sulṭān<br>Ustājīlū> <sup>2)</sup><br>Murshid Qulī Khān Ustājīlū |
| 1585 | 'Abbās Mīrzā を連れた 'Alī Qulī Khān が侵攻,<br>Murshid Qulī は応戦中に王子を獲得し, 即位させる  |      |   |
| 1587 | Murshid Qulī Khān, 'Abbās を連れてカズヴィーンに<br>進軍, 'Abbās, カズヴィーンにて即位   | 1587 | Ibrāhīm Khān Ustājīlū   |
| 1588 | 'Abd Allāh Khān Uzbek の侵攻, 2カ月間の包囲の後<br>撤退, ホラーサーン一帯食糧難<br>'Abbās はマシユハドに入城するが, 退却                              | 1588 | Ummat Khān Ustājīlū   |
| 1589 | 'Abd al-Mu'mīn Khān Uzbek の侵攻, 数カ月間の包囲<br>の後に占領, 以後10年間シャイバーン朝支配  | 1589 | [U] Khudāy Nazar Bī   |
| 1596 | Ṭahmāsp の遺体をレザー廟から移す  | ?    | [U] Abū al-Muḥammad Bī  |
| 1598 | 'Abd Allāh Khān と 'Abd al-Mu'mīn Khān 死去<br>'Abbās, マシユハド入城, レザー廟に参詣  | 1598 | [S] Būdāq Khān Chigānī  |

主要史料として挙げた諸史料に依拠し作成。

[S] = サラアヴィー朝 [U] = ウズベク族 (シャイバーン朝) [T] = ティムール朝  
・ <>内は師傅(jala)職に就任していた者であり, 実質上の統治者。

1) 951/1544年の Humāyūn 来訪時のマシユハド統治者。Afḍal のみ, Ighūt Beg Ustājīlū  
と記す[Afḍal, If:123a]。

2) Shāh Qulī Sulṭān は, Salmān Khān の師傅職にはあったが, ジャームの統治権を与  
えられており, マシユハド統治には介入しなかった。

んだキジルバーシュ軍を追撃すると同時に、同じく廟内に避難していたサイイドやウラマーなどの住民を含む数千人を殺害した。その後、三日間の略奪期間を設定し、レザー廟の財産を略奪した。

このように、一六世紀末のウズベク軍のマシェハドにおける征服時の対応は、一六世紀初頭の対応、すなわちキジルバーシュ軍のみを攻撃対象とし、サイイドを中心としたマシェハドの有力者を尊重すると共に、レザー廟にも参詣するという穏当な対応とは様相を異にしているのである。

シャイバーン朝によるマシェハドにおける征服時の対応が大きく異なったのは何故か。この問いに対する解答を得るためには、半世紀に亘ってマシェハドを支配したサファヴィー朝政権による宗教政策と、その結果として生じたマシェハドの諸状況の変化を明らかにせねばならない。

そこで本稿では、まず第一にサファヴィー朝によるマシェハド支配の実態を、サファヴィー朝が行った軍事的・経済的庇護政策、及びその他の諸政策の点から考察する。次いで一六世紀に移住してくるウラマー層によるマシェハドの都市社会の変化に視点を移し、彼らによりマシェハドのシーア派化が促進されたことを明らかにする。そして最後に、当時のサファヴィー朝のシーア派信仰とはどのようなものであったのか、ということにも言及しつつ、シーア派化の進んだマシェハドの 'Abd Allāh Khān 率いるウズベク軍の侵攻について考察する。

本稿によって、現代に繋がるイランのシーア派化において、サファヴィー朝が果たした役割とその意義の一端を明らかにすることができると思われる次第である。<sup>⑤</sup>

① イシムンドの歴史・地理及びレザー廟の各建築物などの紹介として、  
A. Murāmi, *Rahamā yā Tarīkh wa Tawṣīf Dārāt-i Wīlayat-i mādāt-i Rīdāwī*, Mashhad, 1348 [タムルミン1348年略記]；A. Utīrīdī, *Tarīkh-i Āstān-i Quds-i Rīdāwī*, 2 vols. Tehran, 1371；  
"Meshhed", *Encyclopaedia of Islam* 1st. ed.；"Āstān-e Qods-e

Razawī", *Encyclopaedia Iranica* などが挙げられるが、何れも概説の域を出ていない。また、ティムール朝期とは、レザー廟の諸施設の建設が盛んとなったが、そのことは L. Golombek and D. Wilber, *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, Princeton, 1988, 328-336 が論じている。

③ 當時の抗争については M. B. Dickson, *Shah Tahmasb and the Uzbeks (The Duel for Khurdsan with 'Ubayd Khan: 930-946/1524-1540)*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1958 (以下 Dickson 1958 と略記) が詳しい。カソリーン期のイスマハンを巡る抗争は前後の経緯も含めて、同書の一八一—一四二—一六五頁を参照された。

④ Murāmin 1348, 226. 一方、イスマハンの住民はサフマウチャー朝、シャイバーン朝双方に帰順を示しており、当時、彼らにとっても重要な事力であった。このようなイスマハンの有力者たちの動向は、同時期のハラートでの動向と全く同様である。シャイバーン朝、サフマウチャー朝両政権の支配を抵抗することなく受け入れた当時のハラートの状況については、久保一之「十六世紀初頭のハラート——二つの新興

### 中世イランの歴史

Ā'in: "Ā'in-i Shāh Tahmasb Safawī dar Qānūn-i Saltanat", *Bor-rasihā-yi Tārīkhī* 7-1 (1351)

'Abbās: *Shah 'Abbās -Majmā'a-yi asnād wa mukātibāt-i tārihi hamyah ba yādāshihā-yi tajrīh*, ed. 'Abd al-Husayn Nawā'i, 2 vols. in 3 parts. (Tehran 1952)

*Afāqī*: *Paqli Khāzāni, Afāq al-Tawārikh*,

*Afāq I*: ms. Library of Eton College No. 172, *Afāq II*: ms. British Library Or. 4678

*Āhsan*: *Āhsan Beg Rūmlū, Āhsan al-Tawārikh*, ed. 'Abd al-Husayn Nawā'i (Tehran 1357)

'Alī Ra'īs: *Sayyid 'Alī Ra'īs, Mir'āt al-Mamāzīh*, ed. Ahmed Jewdet (Istanbul 1313/1895)

王朝の支配——』『史林』七一(一九八八)以下、久保一九八八と略記)を参照された。

④ Shaybani Khan のカキ一願参証については Faqi Allah b. Rūzbihān, *Mithamān-nāma-yi Būkhārā*, ed. M. Sādeh, Tehran, 1341, 336-341 頁の記述を参照。またこの問題については Haarmann の譯著を参照された [U. Haarmann, "Staat und Religion in Transoxanien im frühen 16. Jahrhundert", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 124-2 (1974) 349]。

'Ubayd Allah Khan のカキ一願参証については Dickson 1958, 147-148 を参照された。

⑤ 本稿では ( ) は語の説明で、「」は筆者による語の補綴に用いられる。また、史料中イスマハンの後に記される發辭等は、必要と思われる場合以外は省略した。

*Firdaws*: 'Alā al-Mulk Shūshatari, *Firdaws dar Tārīkh-i Shāshkar wa Barkhī az Mashāhīr-i ān*, ed. Mir Jalāl al-Din Husayni Urmawi (Tehran 1352)

*Hābit*: *Khwandamīr, Tārīkh-i Hābit al-Siyar fi Akhār Afāq al-Bakhar*, ed. Jalāl al-Din Humā'i, vol. 4. (Tehran 1953)

Kaempfer: *Engelbert Kaempfer, Am Hofe des persischen Großkönigs 1684-1685*, ed. H. Erdmann (Tübingen 1977)

*Khāqāni*: *Wali Quli Shāmlū, Qisas al-Khāqāni*, ed. Sayyid Hasan Sadāt Nāsiri, vol. 1. (Tehran 1371)

*Khulāsat*: *Qādi Ahmad al-Qummi, Khulāsat al-Tawārikh*, ed. Ihsān Ishrāqi, 2 vols. (Tehran 1359, 1363)

*Maqlā'*: *Muhammad Hasan Khān Marāghī, Maqlā' al-Shams*, vol. 2. (Tehran 1301)

Membré: Michele Membré, *Mission to the Lord Sopyly of Persia*

(1539-1542), trans. A. H. Morton (London 1993)

*Mur'minin*: Nūr Allāh Shushutari, *Majālis al-Mur'minin*, ed. Hājji

Sayyid Ahmad, 1 vol. in 2 parts. (Tehran 1375)

*Nuqṭawāl*: Mahmūd Afsharī-yi Nāṭanzī, *Nuqṭawāl al-Ālhar fi Dhīḥir*

*al-Ābhyāḥ*, ed. Ḥsān Ishrāqī (Tehran 1350)

*Qū*: Mirzā Muhammad Tunukābūnī, *Qisṣ al-'Ulamā'*, ed. Āgā-yī

Hājji Sayyid Mahmūd Kirābchī (Tehran n. d.)

*RJ*: Muhammad Baqir Khwansārī, *Rawḍat al-Jannāt fi Ahwāl al-*

*'Ulamā' wa'l-Sādāt*, eds. M. T. Kāshfi and A. Ismā'īlyin, 8 vols.

(Tehran-Qum 1390-92)

*Sulṭat*: Sayyid Ḥusayn Ashtarābādī, *Tārīkh-i Sulṭat az Shaykh*

*Ṣāfi wa Shāh Ṣāfi*, ed. Ḥsān Ishrāqī (Tehran 1364)

*TAA*: Iskandar Beg Munshī, *Tārīkh-i Ālam-āwā-yī 'Abbāsī*, ed.

Īraj Afshār, 2 vols. (Tehran 1350)

*Tahmasb*: Shāh Tahmasb Saḡawī - *Majmū'a-yi asnād wa nuhkātībā-*

*lāt-i tārikhī hamrah bā yaddashtāh-yi taḡfīlī*, ed. 'Abd al-Ḥusayn

Nawā'i (Tehran 1350)

*Tamīliat*: 'Abdī Beg Shirāzī, *Tamīliat al-Akhbār*, ed. 'Abd al-Ḥusayn

Nawā'i (Tehran 1369)

## I サファヴィー朝政権とマシユハド

シーア派を標榜したサファヴィー朝政権にとり、マシユハドはどのような意味を持ち、どのような存在であったのか。まずこの点を、サファヴィー朝がこの聖地に対して行った具体的な政策を見ながら考察しよう。

マシユハドがサファヴィー朝支配下にあった一五三二年から一五八九年までの五〇年間は、ほぼサファヴィー朝第二代君主シャー・タフマースプ Shah Tahmāsp (在位一五三四—一五七六)の治世と重なる。それ故、サファヴィー朝側のマシユハドに対する政策として、主にタフマースプの採った政策を中心に検討することとする<sup>①</sup>。

### (1) レザー廟を中心とした対マシユハド庇護政策

軍事面では、まず第一に、サファヴィー朝支配下の他都市と同様に、部族単位でその地に居住するキジルバール部族が配置されており、部族長であるキジルバール・シャ・アミールがハーキム(地方長官)として、一族を率いてこの都市の防衛に携わっていた(年表参照)。ホラーサーンに位置するマシユハドには、東方からウズベク軍が度々侵攻したが、ウズベク

軍とキジルバーシユ軍との攻防を年表を参考に見ていくと、一五二六年や一五二九年には、'Ubayd Allah Khan の侵攻に対して駐屯していたキジルバーシユ部族が抗しきれず、ウズベク軍のマシユハド占領を招いていたのが、一五三一年には、当時のハーキムが近郊のアミールと協力してウズベク軍を撃退し、また一五三五年には、'Ubayd Allah Khan 自身の侵攻に対して、不在であったハーキムに代わって妻子が籠城の指揮をとってマシユハドを守り抜いた。キジルバーシユ軍がウズベク軍を撃退するようになった一五三〇年代以降はマシユハドの防衛力も安定し、有能な支配者である 'Ubayd Allah Khan を失い急速に弱体化したシャイバーン朝勢力による被害は最小限に食い止められた。サファヴィー朝がマシユハド支配を確実なものとするためには、このようなキジルバーシユの軍事力が必要であったことは言うまでもない。

しかしながらマシユハドにおいて重要なことは、外敵から都市を防衛するキジルバーシユ部族とは別に、マシユハドの心臓部であるレザー廟にコルチが配備されていたことである。<sup>③</sup>

聖廟に配備されるコルチの存在は、イラン国内の他の聖廟では未だ確認されていないが、マシユハドでは、タフマースプの甥の Sultan Ibrahim Mirza がハーキムに任命された時（一五五六年）に初めて確認される。この王子は、五〇〇人の各部族のアミールの息子たちとテヘランのコルチを従えてマシユハドに赴任したというが [Khatūṣat, 60]、この事実を裏付けるように、王子の統治期間中にマシユハドを訪れた Sayyidi 'Ali Rais は、二〇〇人の鎖帷子をつけたコルチが自分を逮捕しにやってきましたと述べている [Ali Rais, 77-78]。さらに、一五七八年には、'Jalal Khan Uzbek の侵攻に対して、ハーキムの Murtaḍa Quli Khan は自軍のキジルバーシユ部族とマシユハドのコルチ、あわせて一五〇〇人ほどで迎え討ったという [Khatūṣat, 67]。これらの事実から、マシユハドでは、武器を携帯し、時には外敵の侵攻に対してキジルバーシユ軍と共に応戦する数百人規模のコルチが、主としてレザー廟及び町中の治安維持に携わっていたと言えよう。

次に、経済面を見ていくと、コルチに見られる軍事面での特別な保護のみならず、経済面でもレザー廟は格別な援助を受けていたことがわかる。



タフマースプは吝嗇家であったと言われているが、<sup>④</sup>聖地には惜しみなく私財を費やした。彼は、まず、一五二八年のシャームでのウズベク軍との戦いで勝利できたことに感謝して、「レザー廟のドームの屋根を黄金にする」という誓願（*hazm*）を行った【*Nuqtaat*, 14】。そしてこの誓願の実行にあたり、王室の財宝庫から純金と金貨を捻出し【*amniat*, 75】、ドームに六三マン（*man*）<sup>⑤</sup>、またミナレットに一七マンの金を費やして【*Nuqtaat*, 15】、墓廟のドームとミナレットに黄金を箔した。<sup>⑥</sup>

さらに、タフマースプは、レザー廟の諸経費のために、奉納やワクフ（寄進）の形で資金を提供したが、<sup>⑦</sup>中でもレザー廟の毎日の飲食費について、*Nuqtaat* に次のような記述がある。

信仰の避難所たる王（タフマースプ）は、毎年献上品や収入の中から総額八万トゥマンを、偉大なるメッカ、栄光あるメディナ、無謬なるイマーム様たちの神聖なる殉教地、高貴なるイマームザーデたちの墓などの聖なる場所や祝福されたる敗居に送っていた。その中でも毎日五トゥマンが、服従を要するイマーム、*Ah b. Musa al-Rida* 様の管轄（*sarkar*）の食物や飲み物の消費に定められた。そしてこの五トゥマンを美味な食事に費やし、朝晩、清掃人（*fartashan*）や奉仕人たち（*khidmatkaran*）が貴人の様式で、ピクルスや青菜を添えて、サイドやウラマーや参詣者やハーディムたちからなる諸階層の人々に提供していた。【*Nuqtaat*, 15】

*Nuqtaat* のこの記述は、著者が同郷の王室税務官（*mustawfi-yi khāṣisa wa daftardar-i khāṣa-yi shāh*）から直接聞いた話であり、信頼性に富む。この中で特記されているレザー廟の一日五トゥマンの飲食費とは、これのみで年間二千トゥマンという莫大な額に達するのである。<sup>⑧</sup>そしてこのような飲食費の他にも、ハーディムや教師たちの俸給、及びサイド、ウラマー、学識者、困窮者たちにかかる諸経費など、レザー廟に関係するあらゆる支出が、王室の設定したソウルガルやワクフ地から賄われていたとしよう。<sup>⑨</sup>【*TAA4*, 149】。

以上のような奉納金すべてを合算すると、相当な金額がレザー廟に対して王朝側から援助されていたことになり、君主タフマースプのこの聖地への関心の高さが窺われるのである。

(2) シーア派信仰普及政策

タフマースプのマッシュェハドへの関心が特に強まったのは、一五五五年、オスマン朝との間に半世紀に亙る抗争を終結させる和議が締結された時のことである。この年懸案の対オスマン朝問題を終結させ、アゼルバイジャンから帰還したタフマースプの心境を史料は以下のように記している。

万民の王(タフマースプ)の心には以下のことによぎった。「日に日に明らかになるこれらすべての援助や恩寵は、イマーム様たちの聖域の聖なる内面から生じているのである。……とりわけ Yahya b. Musa al-Rida 様の光輝く聖廟と香高い殉教地は、禁じられた行爲 (manhiyat) の埃や望ましくない行爲 (makrūhāt) の汚れから免れ清らかでなければならぬ。」[*Khulāṣat*, 380]

こうしてマッシュェハドに目を向けたタフマースプに、「マッシュェハドのハーキムたちの怠慢により、聖地管理の基本が等閑にされている」という知らせが何度も入った[*Khulāṣat*, 380]。そこで、彼は当時のハーキムを罷免し、新たに「熱心な性質の人物」を選んだ。その結果、タフマースプのただ一人の同腹の弟である Bahram Mirzā の息子、Sultān Ibrāhīm Mirzā がハーキムとして任命された。マッシュェハドへの王族の配置はこの時が初めてである上、この王子がタフマースプの寵愛する甥であり、幼少時に地方都市へ派遣される王子とは異なり、当時既に成人していたことから、タフマースプがマッシュェハドを要地と見なしていたことが推察できる。<sup>⑩</sup>

Ibrāhīm Mirzā は大勢の画家や詩人などの芸術家を保護していたことで有名であり、その芸術を愛好する気質から、彼のシーア派信仰の弱さを指摘する研究も存在する。<sup>⑪</sup>しかし、この王子は「ウラマーとの会話は最良の宝物」との言葉に従って、大半の時間をウラマー (ulamā-yi dānish) や哲学者たち (fakamā-yi aḥfāṭun-nūar) との交流に費やし、時には理性や伝承による学問 (ulūm-i ma'qūl wa manqūl) の習得に励んだと言われている。<sup>⑫</sup>また、イスマーイール二世 Shah Ismā'īl II (在位一五七六一一五七七) が即位した後も、宮廷でシーア派ウラマーと交流する王子の様子が確認を

れる [TAA4, 214]。それ故、彼が十分な学識を備え、シーア派教義にも通じていたことは疑いの余地がないことであろう。<sup>④</sup>  
この王子の赴任早々にマシェハドを訪れたオスマン朝の海軍提督 Sayyidi 'Ali Râis は次のような事件に遭遇した。

九六四年ムハッラム月一日（一五五六年二月四日）、〔私は〕 Mashhad-i Khurāsān にやこびた。……Bahram Mirza の息子である Ibrahim Mirza がその地の統治者 (sultān) であり、シャー（タフマースプ）の息子 Sulaymān Mirza もその地にいた。彼らと……会見し、王子たちからシャーの所に行くため人を求めると了承され、実が開かれた。会話 (mušāhabat) の最中、「王子は」私に「アリー様とアブー・バクル、ウマル、ウスマーン様たち——彼らに至高なる神の満足あれ——のことで、彼らのカリフ位 (khiṭāf) と優越性 (biwṭiyat) についてあなた方と議論しよう」と言って幾つかの質問をし、答えを求めたので、私の方は「返答は最も愚かなことである」を実践し、黙っていると、何度も非常にせかされたので、……「私たちはここであなた方と論争するために来たのではありません。今日は質問も返答もできません」と言った。〔Ali Râis, 76-77〕

この論争からようやく抜け出した 'Ali Râis らの一行は、しかしながら、オスマン朝からシャイバーン朝に向けて派遣された密使ではないかとの嫌疑をかけられ、翌朝二〇〇人のコルチに捕らえられる。そして所持品をすべて没収され、監禁されるのである [Ali Râis, 78]。一行が解放されるのは、'Ali Râis の自作した詩がアリーをはじめとする一二人のイマームに関連したものであったことから、彼の思想がシーア派信仰に近くと判断されたためである。さらに当時のムタワッリーが王子に取りなして、十日後、ようやく彼らは解放された [Ali Râis, 83]。

この事件から明らかのように、王子はオスマン朝からの参詣者にシーアースナ論争を挑み、ついには逮捕監禁まで行ったのである。ここからこの王子のシーア派信仰の弱さは見えず、むしろ熱烈なシーア派信徒である姿勢が浮かび上がる。堅固なシーア派信仰を持つ王子のこのような態度は、マシェハドの綱紀肅正を目指したタフマースプの期待に沿うものであったのではなからうか。タフマースプが王子を信頼していたことは、タフマースプの異母弟であり、反乱を起こした Sam Mirza がマシェハド統治を希望した際に、一旦は受理されたものの、「Sam Mirza がホラーサーンにいることは困

表1—16世紀のレザール家のムタワッリービの就任表

| 就任年           | ムタワッリービ名               | 出身地     | サイン            | 備   | 考 | 典拠                             |
|---------------|------------------------|---------|----------------|---|---|--------------------------------|
| ① ?           | Mir Niẓām al-Mulk      | マソユハド   | レザール家          | 1528—1537年頃に担当  |   | At. II : 38a, 43a, 45a, 97a    |
| ② 1540<br>(?) | Khwāja Amir Beg Kafajī |         | —              | ホラーサーンのワズィール兼任<br>1551年投獄                                 |   | A. 457-8                       |
| ③ ?           | Mir Darwish Beg        | ?       | サフアヴィー家<br>(?) | ニスバガサフアヴィー  |   | Kh. 974                        |
| ④ 1554        | Khalīfa Asad Allāh     | イスマアール  | ○              | 10年間就任, シヤイフル・イスマール兼任, 学識者, 信仰心厚い, 表2—②                   |   | Kh. 438-9, 974                 |
| ⑤ 1563        | Mir ‘Abd al-Wahhāb     | ジュエジュタル | フサイソ家          | 後, デイズールの長官<br>父兄弟ともに宮廷で重用される*                            |   | Kh. 439<br>T. 149              |
| ⑥ 1564        | Mir Sayyid ‘Alī        | コム      | レザール家          | マソユハドのワズィール兼任, 後, カズヴィーンのワズィール, 王領地の管理者                   |   | Kh. 446, 558                   |
| ⑦ 1567        | Mir Abū al-Walī        | ソーラーズ   | イソジュール家        | wājiḥ 担当, すぐに辞任<br>狂信的なソーラー派教徒, 後, カーデー・<br>ワズカル, 20年間マドル |   | Kh. 460-1, 990<br>T. 148, 1089 |
| ⑧             | Mir ‘Abd Allāh         | ?       | △              | sunnaṭī 担当  |   | Kh. 460-1, 990                 |
| ⑨ 1567<br>(?) | Mir ‘Alī Muḩaḩḩal      | ワズカラール  | ○              | おそらく⑨の後任<br>二期(⑩)合わせて15年間就任                               |   | Kh. 581, 732, 899              |
| ⑩ 1574        | Mir Kamāl al-Dīn       | ワズカラール  | ○              | タフマースト薨去時まで就任<br>wājiḥ と sunnaṭī を各々が担当                   |   | Kh. 581<br>T. 149              |
| ⑪             | Mir Abū al-Qāsim       | イスマアール  | ハリーフ家          |   |   | Kh. 581<br>T. 149              |
| ⑫ ?           | Mir ‘Abd al-Karīm      | ?       | △              | 1580年戦死   |   | S. 112                         |

|                      |                   |                |       |                                  |                     |
|----------------------|-------------------|----------------|-------|----------------------------------|---------------------|
| 1580                 | Mirzā Shukr Allāh | イスマティーン        | —     | ホラーサーンのクズイール<br>ムタワッリーに任命された年に死去 | Kh. 713<br>T. 162-3 |
| 1582                 | Mir 'Alī Mufaddal | フスタラーバード       | ○     | 二度目の就任(⑨), 1589年殉教               | Kh. 732             |
| 1589—1598 シャイバーン朝支配期 |                   |                |       |                                  |                     |
| 1598                 | Qādi Sulṭān       | トルバチ・ハイダ<br>リー | ハーサー家 | 1617年まで20年間就任<br>後、サドル           | T. 568, 752, 928    |

史料略号(表1・2共通)：A=Akṣan, Al=Ajlāf, F=Firdaws, Kh=Khulīṣat, N=Nuqṭawat, S=Sulṭānī, T=TAA.  
 史料中にサイイドとして名前の挙がる者に○を、また、サイイドとは書かれていないがサイイドを示す「Mir」という称号を持つ者に△を付した。  
 \* 兄弟の 'Alī もサドル辞任後にムタワッリーに就任したといるが[Firdaws, 22, TAA, 149], Khulīṣat では確認できず、何れかの史料が兄弟の名を取り違えている可能性もある。

家にとり相応しくない」との理由から却下された事実との比較からも明らかであろう<sup>⑨</sup>。

一方、Ibrāhīm Mirzā のハーキム職への任命と相前後して、タフマースプはレザー廟のムタワッリー (mutawallī) 職においても新たな方向を打ち出した(表1参照)。レザー廟の諸管理に携わるムタワッリーは、サファヴィー朝以前からのマッシュハドの要職の一つである。ティムール朝期には、レザー廟の管理はマッシュハドのムーサー家やレザー家のナキーン(サイイドの長)が担っていた[Ḥabīb, 333]。一六世紀のこの職については未だ十分に明らかにされていないが、一六世紀初頭にムタワッリーとして名前の挙がる Mir Nizām al-Mulk Ridawī (表1⑩) はマッシュハドのレザー家のサイイドであることから、サファヴィー朝期に入ってもマッシュハドのサイイドが廟の管理を行う状況は変わらなかったと考えられる。しかしながら、サファヴィー朝によるマッシュハド支配が安定した頃から、レザー廟のムタワッリーの任免は王によって為されるようになった。タフマースプ自身による任免の背景には、前節で見たように、彼がレザー廟に対して種々の寄進を行うようになったことが理由として挙げられよう。すなわち、王自身がワクフを行ったため、その管理者は王が任免する権限を有したのである。

ここで注意すべきは、最初の被任命者であろう Kajali (表1—②)以降、タフマースブが任免するようになってからは、マシュハド出身のサイイドがムタワッリー職に就任することはなくなり、代わってイラン国内のサイイドが就任している点である。特に、タフマースブの関心がマシュハドに向けられた一五五四年以降は、Khalifa Asad Allah (表1—④)や、Mir Abū al-Walī (表1—⑦)など、シーア派で名高いサイイドたちが任命されている。

これらの職は、Mir Abū al-Walīと Mir 'Abd Allah (表1—⑦と⑧)の就任時(一五六七年)に、布施などの臨時収入を管理する *wāhibi* と、宴やハーディム、教師の俸給など王室財産から賄われる諸経費を管理する *sumari* に二分割され、肥大化している。また、時代が下るにつれて、サドルなどに昇進する者も多く現れている。レザー廟のムタワッリー職は、サファヴィー朝の諸官職の中でも重要性を増していったと考えられる<sup>19)</sup>。

以上の如きハーキム職への王族の登用や、レザー廟のムタワッリーの任免に共通して見られることは、タフマースブがマシュハドにシーア派の人物を意図的に送り込んだということである。そこにはシーア派信仰の浸透を目指すシーア派政権の思惑が表れている。そのことを最も顕著に示す政策は、当時、シャイフル・イスラームなどの宗教的官職の任免に、君主自らが関与し、正統なシーア派ウラマーを導入したことであるが、これに関しては次章で扱うことにしたい。

そしてこれらのサファヴィー朝政権が直接介入した人事以外にも、タフマースブは、マシュハドを筆頭とするシーア派の都市で四〇人ずつの男女の孤児に衣服と必要な物を提供し、男女の敬虔なシーア派教師や誠実な世話人を任命して孤児に教育を施すという政策を行っていた<sup>20)</sup> [TMAA, 123]。この政策からは、彼が孤児に注目し、シーア派信仰を地域社会や民衆にも浸透させようとしていたことが理解される。

以上の考察により、イマームの聖廟を有するマシュハドに対してサファヴィー朝が別格とも言える軍事的・経済的庇護を与えていたこと、及びそれらの庇護の一方で、王朝側は自ら掲げるシーア派信仰を普及させるべく、シーア派の人物を

意図的にこの聖地に送り込んでいたことが明らかとなった。

ところで、タフマースプ時代に行われたこれらの庇護及び政策は、隣国のスンナ派王朝であるオスマン朝やシャイバーン朝との対外的な政治状況の枠組みの中で考えなくてはならない。一六世紀のサファヴィー朝は、東方ではホラーサーン地方を掌握したものの、西方ではスレイマン大帝のもとで圧倒的に優勢な立場にあったオスマン朝によって、ナジャフやカルバラ、カーズィマインといったシーア派聖地を含むイラク地方を奪われ（一五三四年）、その状態のまま一五五五年にオスマン朝と和議を締結した。すなわち、サファヴィー朝政権は、これらの対外戦争による東西両国との領土の確定により、イラン国内のシーア派聖地に目を向けることを余儀なくされ、その結果、イマームの聖地の中では唯一残されたマシュハドにその関心が集中したと言えるのである。

そして、マシュハドはイラン国内で最も重要な聖地として様々な恩恵を享受する一方、シーア派信仰の国内への浸透を目指すサファヴィー朝政権にとっての「象徴」的存在としての役割を担うようになっていった。Khuṭbat には、大略次のような記事が載せられている。

タフマースプはホラーサーン遠征に赴く度にレザー廟を参詣していたが、一五三七年の第四次ホラーサーン遠征からの帰路には、新たに「以後毎年レザー廟に参詣しよう」という誓願を行った。もっともこの誓願は彼が死ぬまで四〇年間一度も実行されることはなかった。しかし彼は毎年代理人 (*na'ib*) を任命し、年末に (*dar akhīr-i sal*)、参詣のためにマシュハドに派遣していた<sup>⑧</sup> [Khuṭbat, 1002]。

先にも述べたように、この誓願の行われた一五三七年には、イラク地方は既にオスマン朝の支配下にあった。言うまでもなく一五一七年以降、メッカ、メディナの両聖地もまた、オスマン朝の支配下にあった。そのためバグダード近郊のシーア派聖地のみならず、イスラム教徒の巡礼地のメッカにもタフマースプが直接巡礼することはもはやあり得ないことであつた。この事実を踏まえて今一度先の記事を見てみると、その中で言われている「年末 (*dar akhīr-i sal*)」とは、ヒジ

ムラ暦の最終月、すなわち巡礼月であるズー・アルヒッジャ月を指すことは明らかである。つまりタフマースブのこの誓願は、メッカ巡礼の代替としてのマシユハド参詣を意図したものであり、サファヴィー朝領内においてマシユハドが最も重要な聖地と見なされていたことを裏付けるとともに、メッカの代替としての役割をマシユハドに与える政権側の意向もまた看取できるのである。<sup>②</sup>

一六世紀のマシユハドは、以上見てきたサファヴィー朝政権による数々の庇護や政策を経て、スンナ派教徒も参詣した聖地から、サファヴィー朝というシーア派を標榜した王朝集団にとつての「シーア派聖地」となっていくのである。<sup>③</sup>

① 初代イスマーイールがマシユハドにどのような関心を寄せていたのかは、現段階では確認し得ないが、彼はマシユハドよりもむしろ、ナジャフやカルバラーなどイラクの方に関心を向けていたようである。例えば、*Habib*, 495-496, 508 など。

また、タフマースブの死後、マシユハドを含むホラーサーン一帯はキシルバールシユ諸部族の内訌による混乱期に入り、サファヴィー朝君主によるマシユハドへの政策は殆ど確認されなう。

② 各都市のキシルバールシユによる統治については、K. M. Rührorn, *Provinzen und Zentralgewalt Persiens in 16. und 17. Jahrhundert*, Berlin, 1966 [以下、Rührorn 1966 と略記] が参考になる。

③ T. A. 203. 王に直属する近衛兵としてのコルチの役割については、羽田正「コルチ考——十六世紀イランの近衛兵制度——」『史林』六七三（一九八四）（以下、羽田一九八四と略記）で明らかにされており、氏もまたマシユハドにコルチがいたことについて注で触れておられる。

④ タフマースブの財産は金貨銀貨の現金のみで三八万トマンにのぼる。[Sharaf al-Din Bidlisi, *Sharaf-Nama*, ed. V. V. Vel'yaminov-Zernov, vol. 2. St. Petersburg, 1861, 251-252]。これはこの財産が

あったにもかかわらず、彼は十年以上もコルチに対して俸給を支払わなかった〔羽田一九八四、一四一—一五〕。

⑤ 一マンは約三キログラムに相当する。

⑥ *Mutamin* はドームの屋根を黄金にした時期をヒジュラ暦九三二（一五二五—二六）年としているが [Mutamin 1948, 101]、この年タフマースブはキシルバールシユ諸部族の内訌によりホラーサーンへ赴いていないこと、この部族間抗争のためにマシユハドではハイキムが不在であったこと、その間隙をついて Ubayd Allah Khān がマシユハドに侵攻し占領したこと、など当時の状況に照らし合わせてみると、彼の説は説得力に欠ける。しかるに、タフマースブ時代に書かれた *Tahmilat* では、タフマースブは「九四〇年の午〔刊本の「辰(15)』は誤り〕の歳（一五三四年）」にレザー廟に参詣し聖廟のドームを金で整備するよう命じた、と記されている [Tahmilat, 75]。この記述の一五三四年の方が信頼性があり、正しいと思われる。尚、このドームとレザー廟の金は、一五八九年にウズベク軍によって略奪された [T. A. 447]。マフマースはマシユハド再征服後にこのドームを「タフマースブ同様、金で修復した」[*Mafiz*, 127]。

⑦ タフマースブは、財宝庫から現金で五一六〇〇〇トマンをレザー



廟、フアーテマ廟、テランの 'Abd al-'Azim 廟、サフィー廟などに奉納として送り、またトルガルやマフク地から一万トゥマンを食事や衣服用に送っていたこと、[*Khuzdāt*, 597-598]。次に引用する *Niqāzāt* とは数字が異なる。

⑧ 当時、イランの小麦の値段が四〇ギナーナルでもあったところから [*Niqāzāt*, 57]、一日に二五〇ギナーの小麦を購入できる金額があった。

⑨ I. Afshār の校訂による 'sādāt wa 'umalā' wa fuqarā' wa arbāb-i ishtiqāq' によるところだが、京都大学附属図書館所蔵の写本等では 'umalā' (徴税官) とはななへ 'ulamā' と印刷された。

⑩ サファヴィー朝時代に、重要な地方都市のノキムとして王族が派遣されていたことについては、Rohrborn 1966, 40-44 を参照されたい。尚、選挙、タフースムの息子 Sultān Sulaymān Mirzā (四歳) を 'khādim-bāzār' とし、イマームに任命した [*Khuzdāt*, 391]。

⑪ Ibrahim Mirzā の画家や能書家に残る保護品のごまじり A. Welch, *Artists for the Shah: Late Sixteenth-Century Painting at the Imperial Court of Iran*, New Haven and London, 1976, 150-158 に簡潔に記述されている。

⑫ C. J. Beeson, *The Origins of Conflict in the Safawi Religious Institution*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1982 [文下 Beeson 1982 と略記] 124, 彼女が王子のイマームに統治の期間を正確に把握しているため、王子の寵免の理由など種々の点と見解違つたことを述べている。

⑬ 父親が王子のワズィールであった Qunmī は、争議者と交流する目を設ける王子のイマームとしての生活を送っていた。 [*Khuzdāt*, 385]。  
⑭ Kaempfer によるもの「王子の教育」として、サファヴィー家の王子たちは、シーア派教義やムハンマドと二人のイマームたちの生涯

や奇跡などを学んでいた。シーア派であるペルシアとスンナ派であるオスマン朝の間で争点となっている問題が徹底的に論じられるという [Kaempfer, 35]。

⑮ Sam Mirzā は一五二二—一五三〇年及び一五三三—一五三五年の間、ラーマのノキムであったが、一五三五年に彼の師傅であった Aghazivar Khān Shāmīā に拒がれ、タフースムに対して反乱を起した。ほとんど謝罪したため赦され、アルダビールに居住したが、最終的にカフカス城へ投獄され、子供たちとともに殺害された [*Khuzdāt*, 550-557]。

⑯ Ibrahim Mirzā はタフースムの信頼を失った一五六七年に寵免されるが、それは同年の 'Abd Allah Khān Uzbek に 의한ホラーサーン侵攻の際に、ホラーサーンの各地のフミールが結集して撃退する中、王子が「如何なる方法でも援軍を送らなかつたのみならず」責を問われ、免業に與つた。 [*Niqāzāt*, 49] ためであった。その後王子はしばらくの間、タフースムから疎んじられた。

⑰ Murtamin がレザール廟のムタワッリー職に就任した者を列挙しようが、十六世紀の人々については極めて不十分である [Murtamin 1348, 224-234]。尚、ムタワッリーの職務内容については、サファヴィー朝末期のものを参照せよ。 Mirzā Rafī' al-Dīn Anṣārī, *Dastūr al-Mulūk*, ed. M. T. Danishpazhūh, I-IV, *Majālāt-yi Dānshukhda-yi Adabiyāt wa 'Ulūm-i Farsūh-yi Dānshukh-i Tihān*, 15-5/6, 16-1/2, 16-3, 16-4 (1347-48) [文下 DM と略記] II: 66-68 が参考になる。

⑱ 彼自身がナキープであったかどうかは不明である。

⑲ サファヴィー朝末期には、レザール廟のムタワッリー職は、ムラーハン、サルに次ぐ行政第三位の職種として挙げられている [DM, II: 64-70]。尚、アルダビールのサフィー廟には、ムタワッリーには Maṣūm Beg Saṭāvi と Sam Mirzā など、サファヴィー家の者が

就任していた。Morton がタフマースフ時代のサフイー廟について考察したところ [A. H. Morton, "The Arabiiti Shrine in the Reign of Shah Tahmasp I", *Iran* 12, 13 (1974, 1975)]。

② *Sulaiman* はロジキエラ暦九六三(一五五五—一五六〇)年の出来事の中にこの政策を書き込んでいるが [*Sulaiman*, 87]、著者 Astarabadi が依拠している *Tahra* には特に年代は記されていない [Tahra, 123]。このため、彼の言う九六三年という年代をそのまま借用することはできな。Ain の第六五条にこの政策が挙げられており、教師や孤児には各都市のハーキムを通じて国庫から衣服や食事が支給されたという [Ain, 137-138]。その他 *Khulasat*, 538 にも同様の記事がある。

③ アスタラーバードのサイドが代理人として任命されていた [Ain, 151]。

④ イラン国内の他の聖廟とも比較・検討しなければならないが、特にコムの方アーティマ廟について触れておくと、タフマースフ時代の方アーティマ廟は女性のための墓廟と考えられていたのではないかと思われる。十六世紀、レザール廟には多数の王族が埋葬され、王家の聖廟

## II 一二イマーム派シーア派ウラマーの移住

前章ではサファヴィー朝政権の対マシユハド政策を中心に検討したが、続いて、マシユハドの都市社会に目を向けた場合に看過することのできない、都市の有力者層について見ていこう。

本来、マシユハドの有力者層を形成していたのは、サイドたちであった<sup>①</sup>。しかしながら、サファヴィー朝期に入ると、外部から移住してきた人々により新たな有力者層が形成され、マシユハドの新興勢力としてサイド以上に大きな影響を与えるようになった。サファヴィー朝期になって初めて確認される彼らは皆、一二イマーム派シーア派のウラマーである<sup>②</sup>。

としての性格を持ち始めるが(後註参照)、コムに埋葬されるのは王族の中でも女性ばかりであり、男性はいない。カーシヤール朝期以降と思われるコムが発展については、嶋本隆光「十九世紀のコム (Qum) 市——王朝の庇護と宗教都市の発展——」『オリエンツ』三〇—(一九八七)を参照されたい。

③ タフマースフ時代から十六世紀末のウズベク軍による占領までの間を通じて、タフマースフを含む主要な王族 (Bahram Mirza, Isma'īl 二世に殺害された王子たち) は、父祖の墓廟であるサフイー廟ではなく、レザール廟に埋葬された。タフマースフに反乱した Sayyid Mirza はサフイー廟に埋葬されたことから、当時、レザール廟に埋葬されることは特別なことであったと考えられる。

また、十六世紀には、大勢の王族がマシユハド参詣を行っていた(年表参照)。中でも一五四九年の Part Khan Khanun の参詣は、彼女が生後一年しか経っていないことから、「お宮参り」的な性格があったのかも知れない [Aminat, 103-104]。

特に一六世紀後半には、彼らの存在がサイイドと並んで史料上に散見される。

加えて、TATAのウラマー・リストによると、そこに見えるウラマーの大半がマシュハドと関係を持っている。<sup>⑧</sup>この点から見ても、社会的に重要な地位にあったサファヴィー朝期の一二イマーム派ウラマーとマシュハドとの関係を見過ぐすわけにはいかない。そこで以下、一二イマーム派ウラマーのマシュハドへの移住の観点から、一六世紀のマシュハドの都市社会の状況を考察する。

### (1) 一二イマーム派シーア派諸学の中心地としてのマシュハド

創設と同時に、サファヴィー朝君主はシーア派信仰をイラン国内に広めることを奨励し、一二イマーム派シーア派ウラマーを優遇した。最初期には、レンブノンのジャハル・フーシル出身の 'Ali b. 'Abd al-'Ali al-Karaki と 'Abd al-Fayyaz al-Karaki の Ibrahim b. Sulayman al-Qatifi の二人の学者が重要な役割を果たしたことは既に知られている。<sup>⑨</sup>中でも al-Karaki はサファヴィー朝宮廷と密接な関係を持ち、イスマールイール Shah Isma'il (在位一五〇一—一五二四) やタフマースプによって重用された。そして al-Karaki 以降、シャイフル・イスラームやピーシユ・ナマーズ (礼拝の導師) といった役職は、アラブ出身のシーア派ウラマーを中心として、君主によって任免されるようになった。<sup>⑩</sup>

マシュハドでシャイフル・イスラームやピーシユ・ナマーズとしてアラブ出身者の名が挙がるのは一六世紀後半のことであるが (表2—⑧⑨)、王朝側から任命される彼らの存在を待つかでもなく、シーア派政権下のマシュハドではシーア派の学問活動が始動した。

サファヴィー朝期のマシュハドで最初に活動が確認されるのは、先に挙げたアラブ出身の al-Karaki と al-Qatifi である。彼らは一五一〇年頃マシュハドで論争を行った。<sup>⑪</sup>その際 al-Karaki は、当時数々の点において非難されていたサファヴィー朝を弁護する立場をとり、マシュハドで二書を執筆している。<sup>⑫</sup>サファヴィー朝最初期の思想形成に非常に大き

表2-16世紀マジュヒドで活動した主要な12イマーム派ソーラワラー

|   | 名前                         | 没年      | 出身                  | 前職                          | マジュヒドでの活動<br>(期間)              | リスト* | 備考   | 出典  |
|---|----------------------------|---------|---------------------|-----------------------------|--------------------------------|------|--|---|
| ① | Mir Mu'izz al-Din Muhammad | 1545-46 | イスマトラハン             | サドル                         | 教授(1537~1546)                  |      | al-Karakī に師事, al-Qatifi からイジヤーズ           | A. 405-6<br>R.J. I: 26                      |
| ② | Khalifa Asad Allāh         | 1563    | イスマトラハン             |                             | ソヤイフル・イスマラーム, ムタワッリ(1554~1563) |      | 理性と伝承による学問に通曉。表1-④                         | Kh. 438-9, 974                              |
| ③ | Shaykh Huseyn              | 1576-77 | レバノン<br>(ジヤバル・アームル) | カズガイーン<br>のソヤイフル<br>・イスマラーム | ソヤイフル・イスマラーム,<br>教授(1563~64頃)  | ○    | Shahid-i Thāni に師事<br>Shaykh Bahā'i の父     | T. 155-6                                    |
| ④ | Mawlāna 'Abd Allāh         | 1589(殉) | マジュヒド               |                             | 教授, ツッバースの教師<br>(T~1589)       | ○    | ソーラース, ツラフで学<br>び, 法源論に通曉                  | T. 154, F. 64<br>Kh. 898-9<br>N. 264, 372-3 |
| ⑤ | Mawlāna 'Abd al-Wahid      | ?       | マジュヒド               | ハイダル・ミ<br>ールサールの教<br>師      | 教授(T~?)                        |      | ソーラースで学ぶ<br>④の同輩                           | F. 53-61                                    |
| ⑥ | Mawlāna Muhammad Mushkāk   | 1589(殉) | ロスタムダ<br>ール         |                             | 教授(1569頃~1589)                 |      | レザール廟の幾つかのラ<br>ブで20年間教授                    | M. I: 101                                   |
| ⑦ | Khwāja Afqāl al-Din Turka  | 1583    | イスマトラハ<br>ン         | カーズィー・<br>アスカル              | 教授(M~1583)                     | ○    | 理性と伝承による学問に<br>通曉, カズィーの家系<br>カズィーアーンで⑥に師事 | T. 155<br>F. 60                             |
| ⑧ | Mawlāna Āqā Jāni           | ?       | タフリーズ               | タフリーズの<br>教師                | 教授(1572~?)                     |      |  | Af. II: 211b,<br>266a-267a                  |
| ⑨ | Shaykh Faql Allāh          | 1589(殉) | ツラフ                 |                             | ヒュジュ・ナラース<br>(?~1589)          | ○    | 法学に通曉                                      | T. 158                                      |

|   |                                |         |           |   |                       |   |                             |                       |
|---|--------------------------------|---------|-----------|---|-----------------------|---|-----------------------------|-----------------------|
| ⑩ | Shaykh Taj al-Din Hasan Dag'ud | ?       | フスタラーバード  |   | シャイフル・イスラーム? (?~1589) | ○ | 後、ハーザイム・バツ、督備長、嘉蘭の鑑管理者      | Kh. 900-1<br>T. 157-8 |
| ⑪ | Shaykh Lutf Allah              | 1622    | レバノン(マナス) | — | 学生→教授(?~1589)         | ○ | ④に師事                        | T. 157, 1008          |
| ⑫ | Qadi Nur Allah                 | 1610(殉) | シェーシェタル   | — | 学生(1571~1584)         |   | ⑤に師事                        | F. 24-37              |
| ⑬ | Mir Muhammad Baqir Damad       | 1630    | フスタラーバード  | — | 学生(?~M)               | △ | al-Karakiの後の子に師事、<br>アジュマレフ | T. 146-7<br>Q.U. 333  |

君主略号：T=Fahmāsp, M=Sulṭān Muḥammad Khuḍābanda.

\*TAA 所載のタフマースプ時代のウラマー・リスト [TAA, 154-158] に載っている者に○を付す。  
尚、⑩は、ウラマーであるが、サイイド・リスト中に挙げられていないため、△とした。

な影響を与えたこの二人のウラマーによるマッシュハドの論争が、マッシュハドの二ニイマーム派シーア派諸学の起点となつたと考えられる。

では、実際どのような人物が活動していたのか。一六世紀にマッシュハドで活動した主要なウラマーの経歴を、第一世代(①②)、第二世代(③④⑤)、第三世代(⑥⑦⑧)の三グループの中から抽出して検討しよう(表2参照)。

〈第一世代〉

・Mir Mu'izz al-Din Muḥammad b. Shāh Taqī al-Din Iṣfahānī (表2-①)

イスファハーンのナキープの家系に属す。①イラーク・アジャムの最も敬虔にして学識あるサイイドであり、一五二四年頃にはイスファハーンのシャイフル・イスラームであった [Ḥabīb, 608]。法学に精通し、法学関係の諸問題の大半を al-Karaki のもとで学び、彼に優遇された [Musan, 405]。しかしその一方で、一五二二―二三年には al-Karaki の敵対者と目される al-Qatifi からサイイシャーサ(殺害詔書)を受けしる [RJ, I: 26]。一五三二―三三年に al-Karaki の推薦によ

りサドル職に就任し、五年間サドルを勤め、その間にシャリーアの普及やビドア（異端）の排斥に尽力した【*Alisan*, 406】。ある宮廷医師の讒言によってタフマースブの寵を失い、第四次ホラーサーン遠征の際にサドル職を罷免（一五三七年）されてからはレザー廟に居住し、信仰の諸学問（*ulum-i dinya*）の教導（*it'ada*）や礼拝に従事した【*Alisan*, 406】。一五四五—四六年、メッカ巡礼に行く途中バスラで死去した。

### 〈第二世代〉

・ *Nawānā* 'Abd Allah b. Mahmūd Shushṭari (表2—④)

シュースタル出身<sup>⑤</sup>。若い頃にシーラーズで理性による諸学（*ulum-i ma'qul*）を学んだ後、アラブ地域へ行き、その地の学者たちと交流を持つ。中でもジャバル・アーミル出身の学者と交流し、法源論（*usul*）に通暁する。その後サファヴィー朝宮廷に行き、タフマースブのもとに伺候するが、ほどなくマシユハドに移住する許可を得てイマーム・レザーの墓の側に住み、諸学の教導や信仰の普及に勤めた【*TAA*, 154】。

彼は一六世紀末のマシユハドを代表するウラマーである。そして、マシユハドのウラマーの最高位に位置していたであろう彼は、一五八五年、*Murshid Quli Khan* がマッハース・ミールザーをマシユハドに連れてきた時に、アッバースの腰帯を結びマシユハドで即位の儀を執り行った【*Khaqani*, 126】。さらに、*Murshid Quli Khan* によりアッバースの教師に任じられ【*Nuqṭat*, 264】、良き相談相手としてマッハースに重用された【*TAA*, 154】。このような信頼関係があったからこそ、*'Abd al-Mu'min Khan* の侵攻時に、彼はアッバースに対してマシユハドの荒廃を訴える書簡を送り、その書簡がアッバースをマシユハド遠征に駆り立てるほどの効力を奏したと言える【*Khulāṣat*, 896】。反面、レザー廟のシーア派ウラマーの第一人者であったために、マシユハド陥落時にウズベク軍によって捕虜として連行された。彼はマー・ワラー・アンナフルでタキーヤ（信仰の秘匿）を行い、シャーフイー派として振る舞うが、「ハナフィー派の狂信者たち」によって殺害され、遺体は焼かれた【*Khulāṣat*, 898-899, *TAA*, 155】。

〈第三世代〉

・Shaykh Lutf Allah b. 'Abd al-Karim Maysi (表2-1②)

ジャバル・アーシル地方のマイス出身。高名なシーア派法学者 Shaykh Ibrahim Maysi の孫。若い頃にレザー廟に参詣し、Mawlanā 'Abd Allah Shushitari を筆頭とするレザー廟のウラマーに師事。法学に通曉し、レザー廟の教師 (mudarris) の一員となる。ウズベク軍の侵攻時に救出されてからは宮廷に行き、しばらくカズヴィーンで教授に従事する。後、アッバースの命によりイスファハーンに移る。アッバースは王のモスクの側に彼の名を冠したモスクを建設<sup>⑩</sup>、彼はそのモスクで法学やハディース学の教授に勤めた [TAA4, 157]。一六二二年にイスファハーンで病死した [TAA4, 10087]。

・Qadi Nur Allah b. Sharif al-Din Shushitari Mar'ashi (表2-1③)

シェーシユタルの Mar'ashi 家のサイイフ。Mawminin の著者。彼の父は al-Qatifi のもとでシャリーアの注釈を学び、イジャーズを受けている [Firdaws, 23, RJ, I: 26-27]。一五七一年に「参詣と学問習得のために」故郷を出てマッシュハドへ行き、マッシュハドで Mawlanā 'Abd al-Wahid (表2-1④) に師事する。しかしキシルバーシユの内訌により騒乱が絶えないため、一五八四年にインドへ移り、ムガル朝のアクバルに仕えた [Firdaws, 25]。彼は、シーア派信奉者であるにもかかわらず、アクバルのもとで厚遇され、ラホルの大カーディーを務め、スンナ派四法学派の見解に従ってファトワーを出した。一六一〇年に狂信的なスンナ派教徒によって殺害された<sup>⑪</sup>。

以上、マッシュハドで活動したウラマーの中から、主要な数人の経歴を詳しく見たが、ここでは触れられなかった他のウラマー<sup>⑫</sup>も含めて彼らの経歴を世代ごとに検討すると、第一世代は、Isfahani と Khalifa Asad Allah (表2-1②) 以外には殆ど確認できないものの、シーア派諸学に通じた彼らのようなイラン出身の学識者たちが教授として活動していたことが指摘できよう。また、第二世代は、アラブ出身者で、シャイフル・イスラームやピーシユ・ナマースとして任命された Shaykh Husayn (表2-1④) と Shaykh Fadi Allah (表2-1⑤) が教授を兼ねて活動するとともに、Mawlanā 'Abd Allah

や Mawlāna 'Abd al-Wāhid とらったイラン出身者たちが、アラブ地域やアラブのシーア派法学者から学んだ後に、マシシュハドに移住し、教授として活動した。さらに、第三世代になると、はじめからレザー廟で学問を習得することを目的にマシシュハドを訪れ、第二世代の教授陣から学んでいたことが指摘される(表2—⑪⑫⑬)。このような世代ごとの推移は、徐々にマシシュハドでの学問的活動が活発になっていくことを示唆しており、また、第一・第二世代の学者たちがアラブと関係の深いことから、マシシュハドでは、アラブの伝統的なシーア派諸学が継承されたと思なし得る。

さらに、その学問的活動の内容について見ておくと、*Afḡān* には、九八〇年ラジャブ月(一五七二年一一二月)に、タフマースプが自分の教師 (*mu'allim*) であった Mawlāna Aqa Jani Tabrizi (表2—⑭) に出したレザー廟のイマムラサでの教授の許可証 (*parwāncha*) が引用されている [*Afḡān*, II: 266 a-267 a]。この許可証から、主として神学 (*Kalām-i malik-i 'allām*)、法源論 (*uṣūl*)、法学 (*fiqh*)、ハディース学 (*hadith*) などシーア派諸学全般が教授されていたことがわかる。加えて、Mawlānā 'Abd Allāh Shūstari がシャイブーン朝下でシャーフィイー派として振る舞ったり、Qādī Nur Allāh がインドで四法学派に依じてフアトワーを出したりしていることから、彼らがシーア派法学とスンナ派法学の双方に通暁していたのは明らかである。後述する Mawlāna Muhammad Mushkak Rustandari (表2—⑯) の書簡からも、彼のスンナ・ハディース等への造詣の深さが窺われ、マシシュハドのウラマーは総じて、シーア派諸学を中心にイスラム学全般に秀でていたと考えられる。

以上見てきたように、一六世紀のマシシュハドでは、アラブの伝統に基づいた正統なシーア派の教義や学問を学ぶことが可能であった。しかしながら、一六世紀のシーア派ウラマーの世界ではマシシュハドは未だ二流の地であり、アラブ地域のシーア派諸学の中心地であるジャバル・アーミルやナジャフには到底及ばなかった。マシシュハドでの学問に飽き足らず、ナジャフに勉学に赴く例もある。<sup>⑳</sup>

しかし問題をイラン国内、すなわちサファヴィー朝領内に限ってみると、この時期マシシュハドは第一級の一二イマーム



派シニア派諸学の中心地として発展しているのである。そのことはタフマースプ薨去時に活躍していたウラマーとして TAA4 に名前の挙がるウラマーの半数以上が、その時期にマシェハドで何らかの活動を行っていたことから明らかである。特に一六世紀後半にマシェハドに学問習得のために訪れた Shaykh Lutfi Allah や Gadi Nur Allah たちが、その後一流の学者となっていることは、当時のサファヴィー朝領内でのマシェハドの学問的水準の高さを証明しているよう。一六世紀後半のマシェハドのウラマーは、当時のサファヴィー朝を代表するウラマーであると言っても過言ではない。<sup>⑧</sup>

## (2) 二イマーム派シニア派ウラマーの進出とその影響

では、一六世紀になって新たに続々と移住してきたシニア派ウラマーの存在は、マシェハドではどのように影響したであろうか。

先に挙げた許可証では、Tabrizi の場合、年間総額三〇タブリーズィー・トゥマンの俸給がレザー廟のワクフ財から支払われることが明記されている [Afsar, II: 267a]。第一章で見たように、この俸給はタフマースプ自身のワクフ財によって賄われていたと考えることが可能である。このことから、Tabrizi がタフマースプの許可によって教授として赴任すると同時に、その際タフマースプが彼に経済的保障を確約していたことが明らかとなる。また、彼の他にも教授となったウラマーの中には、移住前に直接宮廷で王の許可を受けている者がいたことが確認される(表2-④⑤、また③⑥は任命)。彼らの場合にも、おそらく Tabrizi と同様の許可証が発行され、経済的な保障が約束されていたと判断してよいであろう。このようなシニア派ウラマーと世俗君主との関係は、サファヴィー朝創設時に ʿĀṭiq al-Dīn Ḥafīz Ḥāshimī が君主からの報奨を拒否した態度と大きく異なっている。<sup>⑨</sup> シニア派信仰を掲げたサファヴィー朝が、様々な問題を抱えながらも国家として確立された一六世紀中葉以降は、シニア派ウラマーの側も王朝の経済力を頼りに行動したと言えるのではなからうか。というのも、彼らは「信仰と学問に従事する」という脱世俗的な目的を掲げてマシェハドに移住しているが、移住先がサファヴィー

朝領内のマッシュハドの場合、彼らは世俗の王朝と無関係ではなく、むしろ逆に緊密であった場合が少なくないからである。アッバースと懇意であった Mawānā 'Abd Allāh Shūshṭari などは、その典型であろう。もっとも、Mawānā 'Abd al-Wahīd のように、ウラマーの中には、宮廷での騒乱を嫌ってマッシュハドに移住した者もいることから、おそらく宮廷のウラマーほど直接世俗事に巻き込まれることはなかったにせよ、マッシュハドにいる限り、彼らはサファヴィー朝と密接な関係を保ちつつ、その庇護下に暮らしたと考えられるのである。

さらに、シーア派ウラマーと王朝の相互依存という関係の密接さは、マッシュハドの有力者層全体のサファヴィー朝に対する姿勢に変化を与えることになった。既に一六世紀中に、サイドはサファヴィー朝政権によって庇護される存在となっていた<sup>⑧</sup>。本来の有力者層の中心を占めていたサイドに加えて、サイド以上に影響力のあった、新勢力のシーア派ウラマー層が同様に王朝によって優遇されたために、マッシュハドではシーア派化が促進されると同時に、サファヴィー朝政権に対しての帰属意識が芽生えた。

マッシュハドの有力者層の帰属意識は、彼らの一六世紀初頭と一六世紀末のウズベク軍に対する対応を比べてみると、より明確となろう。

一六世紀初頭には、サイドを中心としたマッシュハドの有力者たちは、シャイバーン朝とサファヴィー朝の支配を交互に受ける激動期にあつて、どちらか一方の政権にのみ、帰順するのではなく、両政権の支配を抵抗することなく受け入れていた<sup>⑨</sup>。そのため彼らの生命は保証され、彼らはどちらの政権からもサイドとして尊崇を享受し得た。しかし、新たに移住してきたウラマー層は、同じシーア派であること、さらに多大な庇護を受ける立場にあることによって、明らかにサファヴィー朝政権に加担した。一六世紀末、彼らは、直前のヘラート征服時に住民を虐殺したウズベク軍に対して恭順の姿勢をとっていない。先述のように、Mawānā 'Abd Allāh Shūshṭari はアッバースに援軍を要請し、Rustandari は、ウズベク側のスンナ派ウラマーに反駁の書簡を送った。このような彼らの行動から明らかなように、彼らはサファヴィー

朝を庇護者と見なし、シャイバーン朝に対しては敵対すると同時に、思想面での専門家として、サファヴィー朝のシーア派信仰を擁護したのである。

すなわち、一六世紀のマシユハドはシーア派政権庇護下の聖地であったため、ここではシーア派ウラマーとシーア派王朝は当然のように結びついた。その関係は、王朝からは経済面や軍事面での保護がウラマーに与えられ、ウラマーからは思想面での擁護が王朝に対して為されるというものであった。これがこの時期にレザー廟を中心として都市全体で行われたという点に、聖地であるマシユハドの特異性があると言えよう。

以上見てきたように、シーア派聖地であるために他都市とは大きく異なり、都市の動向を決定する有力者層にシーア派ウラマーが進出したことで、マシユハドのシーア派化は決定的なものとなった。しかしウラマーが王朝側と結束し、その利害を共有するようになると、一面では危険も伴う。その危険が現実となったのが、以下に述べるように、一五八九年のウズベク軍の侵攻とマシユハドの陥落であった。

① 中でもイマーム・レザーとその父ムーサー（第七代イマーム）の子孫がマシユハドでは大きな影響力を持っていた [Munim, 1: 115]。Habib には、ティムール朝末期の有力者たちの略歴が紹介されているが、Sultan Husayn Mirza 時代（在位一四七〇—一五〇六）には、ムーサー家とレザー家のナキープたちを統括する三人のナキープの名が列伝の筆頭に挙げられている [Habib, 333]。

② 一ニイマーム派ウラマーの存在は、サファヴィー朝以前のマシユハドでは確認することはできない。スンナ派政権であったティムール朝期には、著名なウラマーは大半が首都（ラート）で活躍しており、一方マシユハドでは、ティムール朝末期からサファヴィー朝初期にかけて、は、マシユハド出身のサイイドが、既述のムタワッリーのみなならず、

カーディーやシャイフル・イスラームといった専門的知識を要する宗教関係の職種をも担っていた [Habib, 334, 614]。

③ タフマースプ薨去時（一五七六年）に活躍していた主要なウラマーの列伝であり、一人のウラマーが載せられているが、その内の七人がマシユハドと関係する [TAA, 154-155]。

④ これまでの研究では、サファヴィー朝初期の君主イスマールとタフマースプは一ニイマーム派の拠点であるバフラインやジャバル・アーミルから多数の学者をイランに招聘し、彼らがサファヴィー朝の正統なシーア派化に貢献したと言われてきたが、近年 Newman はこの説を否定し、実際にはアラブの学者は、サファヴィー朝のシーア派信仰への嫌悪感と移住ウラマーの先駆者である al-Karak への反感

を、サファウィ朝を記録し続けたことを明らかにした [A. J. Newman, "The Myth of the Clerical Migration to Safawid Iran: Arab Shiite Opposition to 'Ali al-Karaki and Safawid Shiism", *Die Welt des Islams* 33 (1993) [27- Newman 1993 48註]]。

⑧ 上記の職に就いた人々のサーン派サーン派の増加については S. A. Arjomand, *The Shadow of God and the Hidden Imam: Religion, Political Order, and Societal Change in Shiite Iran from the Beginning to 1890*, Chicago and London, 1984, 129-132 を参照せよ。

⑨ 両者の論争については Newman 1993, 83-91 を詳し。

⑩ ニューマン派の著作集 *Risāla al-Ja'fariya* 3 人のサーンの説話を説いた *Nahīat al-Lahūt fi La'n al-Fihl wa'l-Tāghūt* の一語を著 [M. T. Danishpazhūh, "Yek Parde az Zandagāni-yi Shāh Tahmāsh Safawī", *Majalla-yi Dānishkade-yi Adabiyāt wa 'Ulūm-i Insāni-yi Mashhad* 7-4 (1350) 967-968]。

⑪ 彼の一族については R. Quiring-Zoehe, *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert: Ein Beitrag zur persischen Stadtgeschichte*, Freiburg im Breisgau, 1980, 210-219 における人物の略歴を参考せよ。今日では十分な研究がなされていない。

⑫ 同じくサーン出身の Shaykh 'Abd Allāh Shāshari による同名のサーン派存在に関する著述。彼の父親の名は Husayn°。

⑬ 王の広場に隣接する Masjid-i Shaykh Lutf Allāh のこと。彼の兄弟の一人はサーン派の軍の侵攻の際に殉じた [Fridaus, 37]。因みに *Fridaus* の著者 Mir 'Alā' al-Mulk は Qādī Nūr Allāh の甥である。

⑭ Shaykh Husayn 'Āmilī (1671-1731) A. J. Newman, "Towards a Reconsideration of the 'Ishāh School of Philoso-

phy": Shaykh Bahā'i and the Role of the Safawid 'Ulama", *Studia Iranica* 15-2 (1986) 169-171 を参照。Mir Muhammad Bāqir Dāmād (1671-1731) S. H. Nasr, "Spiritual Movements, Philosophy and Theology in the Safawid Period", *The Cambridge History of Iran*, vol. 6, 1983, 669-675 を参照せよ。

⑮ Mawlāna 'Abd Allāh Yazdānī (1574年頃没) はサーン派の教師であった。サーン派の法學を著した。サーン派の行へ。サーン派の研究に従事した [Khizmat, 587, 988]。これは当時サーン派世界のサーン派研究の伝統を代表する権威の差を示唆している。尚、サーン派諸学の中心地の時代的推移については M. Momen, *An Introduction to Shi'i Islam*, New Haven and London, 1985, 61-145 を簡単に紹介せよ。

⑯ 一五八九年にサーン派の軍がレザールに侵攻した際、廟内の図書館 (Kitāb-khāna) にはイスマーイールの最も重要な諸都市から集められた様々な本が所蔵されていた [TA44, 413]。また、サーン派の奪回したサーン派は一六〇六年にレザールとサーン派の書物の交換を行った。レザールには「法學」ローラン解釈等、サーン派の書にはアラビア語や学問の書」を、サーン派には「歴史書」詩集、フィッラーの著作などアラビア語の書を寄進した [TA44, 761]。この寄進内容からサーン派諸学に傑出したサーン派の学問の性格が読みとれる。

⑰ al-Qāṭibī の場合、イスマーイール不在時の世俗君主は压制者であるサーン派法學の見解に従って行動し、君主からの報復 [Maqrūb (高きところから)] に見せしめを受ける [Hātib, 610, QU, 349-351]。al-Karaki は彼は対照的にサーン派からソールガンを打ちめ教々の報復を受けた。一方で、サーン派は金曜日の夜に

にはシニア派のウラマーに金貨を下賜するなど、シニア派ウラマーを優遇する政策を行っていたとらう [Knutson, 598]。このような政策が日常化するに、al-Qahir のようなウラマーは少数派に屈したと考えられる。

⑩ タフマースフは、毎年一四人のイマームたちの生誕日には、マシユ

### Ⅲ シャイバーン朝のマシユハド占領とサファヴィー朝のシニア派信仰

最後に、シャイバーン朝によるマシユハド侵攻を手がかりに、シニア派化の進んだマシユハドへのシャイバーン朝の対応を、当時のマシユハドを拠点としたサファヴィー朝のシニア派信仰の特徴と絡めて考察しよう。

#### (1) 侵攻の経緯

一五八八年三月、一年に亙る包囲の後ヘラートを占領した<sup>⑪</sup> Abd Allah Khan は、マシユハド征服を目指して進軍した。ウズベク軍は、二カ月間マシユハドを包囲した後、一旦はバルフに帰還する [TAAI, 389]。しかし、マシユハドまで進軍したアブバース Shah (Abbas) (在位一五八七—一六二九) が、西方領土にオスマン朝が侵攻したことや、ホラーサーンには食糧が不足していたことから撤退したために、Abd Allah Khan は翌一五八九年に、息子 Abd al-Mu'min Khan をマシユハド征服に向けて再度派遣した。

一度目の包囲時に、マシユハドの住民とマー・ワラー・アンナフルのシャイバーン朝下のウラマーとの間で、ウズベク軍のマシユハド攻撃を巡る興味深いやり取りが為されている。先にマシユハドの住民から出された、ウズベク軍の攻撃を非難する書簡<sup>⑫</sup>に対し、シャイバーン朝下のウラマーは、ウズベク軍のマシユハド攻撃を合法 (halal) と見なす次のような返書を送りつけた<sup>⑬</sup>。

ハドヤコムの子イドに金貨を下賜していた [Knutson, 598]。

⑪ 例えは、一五一〇年のイスマーイール入城時 [Afari, I: 150b]、一五二三年の Ubayd Allah Khan の征服時 [Habib, 533] など。本稿はじめに註③参照。

スンナと共同体の民の宗派 (madhab) とウラマーや敬虔なる者たちの神学 (falan) を完全に放棄し、信者たちを第一の信仰へと向かわせず、醜悪なるシーアの道を表明し、不信心 (kufr) であるところの、二人のシャイフ様 (アブー・バクルとウマル) や二つの光の所有者様 (ウスマーン) や「ムハンマドの」清浄なる妻たちの幾人かを誹謗し呪詛すること (sabb wa lan) を容認する者たちの場合においては、全知なる主の命令によると、イスラームの君主のみならず他の全人類にとり、彼らの殺害や弾圧は真の信仰の最も崇高なる行為として義務であり、必要なことである。また、彼らの家屋の破壊や財産の没収は認められる。 [ʿAbbas, I: 183]

ここでシャイバーン朝下のスンナ派ウラマーは、攻撃合法化の理由として「誹謗・呪詛」を挙げている。彼らによると、呪詛は「不信心」な行為であるために、呪詛を容認する者は不信心者 (kufr) となり、その結果必然的に、不信心者の殺害として、マシユハド攻撃は承認されたのである。

このように、このファトワーでは「呪詛」がマシユハド住民を不信心者と見なす唯一の論拠となっているが、呪詛はサファヴィー朝のシーア派信仰と非常に密接に関わる重要な問題である。よって、シャイバーン朝下のスンナ派ウラマーが糾弾する「不信心な行為」であるところの「呪詛」について、サファヴィー朝内での経緯を簡単に見ておきたい。

## (2) サファヴィー朝シーア派信仰における「呪詛」<sup>④</sup>

一五〇一年にタブリーズで即位したイスマーイールは、一二イマーム派のフトバを詠み、シーア派を宣言すると同時に、カリフらへ呪詛を強制した。史料により多少の違いはあるものの、サファヴィー朝による呪詛の対象は、アリーの敵と見なされるアブー・バクル、ウマル、ウスマーンの三人のカリフ、ムハンマドの妻アーイシャなどであった。<sup>⑤</sup>

イスマーイールが即位と同時に始めた呪詛行為の実態を具体的に示す例として、「*tabarrʿat*」と呼ばれる一団の人々の存在が挙げられる。一五三九年から一五四〇年にかけてサファヴィー朝宮廷に滞在した Membre が宮廷内の興味深い光

景を述べているので引用しよう。

宮廷では王が座ると皆が座り、王が立ち上がると宮廷にいる皆が立ち上がる。朝、王が謁見の場へ行くために寢室を出る時、彼は二人の男を連れていく。彼ら二人は各々金属製の太鼓を手を持ち、神を讃え、ウマルとウスマーンとアブー・バクルを呪いながら叫びだす。そして「ウマル、ウスマーン、アブー・バクルに無限の呪いあれ (sad hazār la'nat bar 'umar, 'uṯmān, Abū Bakr)！」と言い、王が席に着くまで叫びながらついていく。それから彼らは静かになる。また、王が部屋に戻ろうとした時も、彼らは王が部屋に入るまで同様に叫び続ける。王の兄弟も同様に、宮廷に行こうとする時には、これらの「*tabarrātī*」と呼ばれる人々の一人を連れて行く。彼は王の兄弟が席に着くまで同じことを叫ぶ。[Membre, 20]

Membre が記すように、彼ら「*tabarrātī*」は、呪詛を生業とする職業集団であり、王の傍らにつき従って三人のカリフやオスマン朝に対する呪詛を日常的に行っていた。<sup>⑥</sup>

「*tabarrātī*」に象徴されるこのようなサファヴィー朝の呪詛行為は、当初から過激で逸脱した行為として認識され、イラン国内の各地で動揺を引き起こした。<sup>⑦</sup>さらに、一五二二年に即位したオスマン朝のスルタン・セリムによって、本格的に非難を受けた。<sup>⑧</sup>セリムは呪詛に限らずサファヴィー朝のシーア派信仰全般を激しく非難したために、そのような非難に答えるべく、イスマールはアラブの一二イマーム派シーア派法学者をイランに招聘した。これらのシーア派法学者の中で最初に呪詛を公認したのが al-Karakī であり、彼が呪詛を擁護する書をも執筆したことは既に触れた。<sup>⑨</sup>

しかしながら、実際はサファヴィー朝に迎合した al-Karakī の態度はアラブの一二イマーム派のウラマーからも非難されたのである。⑩には以下のように記されている。

シャイフ (al-Karakī) はイスファハーンに到着した日、その日の朝モスクへ行き、集団礼拝を行った。礼拝の後、シャイフの弟子の一人がミンバルに登り、敵対者たち (mutakallifan) への誹謗 (sabb) を公言した。この時までその町では誹謗が公言されたことはなかった。

メッカにいたシーア派のウラマーはイスファハーンのウラマー、すなわちミフラーブやミンバルを所有する者たちに書簡を送った。「あなた方はイスファハーンで敵対者たちを誹謗した。我々は両聖地 (Tahayyir) にいるが、民衆はそのような誹謗ゆえに我々を苦しめ懲らしめてくれ。」[QJ: 348]

この記事に見られる如く、呪詛は、正統な二イマーム派ウラマーからも非難されるほど異端的な行為であったが故に、隣国のスンナ派国家には、格好の対立・攻撃の根拠を与えた。セリム以後、オスマン朝もシャイバーン朝も、サファヴィー朝のシーア派信仰を非難する際、常にこの呪詛行為を中心に据えて糾弾したのである。<sup>⑩</sup>

さらに、ウラマーからの法的な糾弾だけでなく、当時の一般認識もまた、呪詛を特別な行為と見なし、それによってスンナ派とサファヴィー朝のシーア派を区別していたことが諸史料より明らかとなる。例えば、オスマン朝の 'Ali Rais はカズヴィーンのタフマースプの宮廷で宗教論争を行った時に、「ルーム(オスマン朝)のウラマーは我々を不信心者と見なしているが、理由は何か?」という質問に対し、

「教友たちを誹謗 (sabb) するからである、と聞いています。法学書には『二人のシャイフの誹謗は不信心である』と書かれています。」[‘Ali Rais, 89]

と端的に答えている。また、一六世紀中葉にマシュハドで五年間ハナフィー派法学とシーア派法学を学んだというスイースターンのハーキムの弟は、両宗派の特徴をいみじくも次のように述べている。<sup>⑪</sup>

「シーアの教義 (madhhab-i shi'a) では、誰かが教友たちを呪詛 (la'n) すると適切 (sawab) と見なします。ハナフィー派は、呪詛を行うと不信心者 (ka'fir) になると主張します。」

これらの事実から、サファヴィー朝シーア派信仰とは、外部の者から見た場合でも、主に呪詛行為がその特徴として焦点となっていることが明らかとなろう。つまり、サファヴィー朝のシーア派教徒、すなわち呪詛を行う人々という認識が、オスマン朝やシャイバーン朝のスンナ派教徒の間にも出来上っていたのである。そしてこのような呪詛を行うシーア派教



徒は、*Ali Rais* たちが言うように、スンナ派からは不信心者 (*Kafir*) と見なされていたのである。

再びサファヴィー朝内の状況に目を転じると、不信心者とまで認識され、スンナ派・シーア派を問わず糾弾されたにもかかわらず、*al-Karak* の容認を背景に、タフマースプもまた呪詛への固執を示した。<sup>⑩</sup> その結果、イスマーイール二世が即位するまでこの行為はイラン国内で連綿と続けられたようである。

一五七六年、タフマースプの死後即位したイスマーイール二世は、スンナ派で名高き *Mirza Makhdum Sharifi* を登用し、呪詛を中止しようとする。<sup>⑪</sup> しかしイスマーイールのこの方針に対して激しい反発が内部から生じているのである。

〔呪詛を中止せよとの命令に対し〕勇敢なるハイダル(アリー)に忠実なシーア派教徒たちは、この知らせを *Mir Sayyid Husayn* と *Mir Sayyid Ali* に伝えた。激情の炎が輝く彼らの心に燃え上がり、彼らはモスクに駆けつけた。説教師 (*Khatib*) をミンバルから降ろし殴り蹴った。そして故 *Mir Sayyid Ali* はミンバルに登り、一二人のイマームたちのフトバを詠み、呪われし者たち (*mal'ain*) を呪詛し、中傷した。 [*Sulhani*, 99]

一六世紀後半、イランのウラマーの中には、*Sharifi* のように呪詛を批判する者がいた。一方ここに見られるように、過剰なまでに呪詛に執着するウラマーもまた、この当時存在したのである。サファヴィー朝下のウラマーの間でさえも変動の見られた呪詛であるが、イスマーイール二世が在位わずか一年半で亡くなると、復活したことは想像に難くない。<sup>⑫</sup>

以上の呪詛を巡る経緯をまとめると、サファヴィー朝の成立と同時に始まった三人のカリフやアーイシャなどに対する呪詛は、スンナ派のみならず、アラブの「正統な」シーア派ウラマーからも非難された逸脱した行為であったにもかかわらず、一部のウラマーによる承認や「*tabarru'at*」と呼ばれる人々の日常的な活動に支えられながら、必要不可欠なものとして、サファヴィー朝のシーア派信仰の基調を成すに至る。従って、当時スンナ派とサファヴィー朝のシーア派を隔てる境界は、偏にこの「呪詛」を行うかどうかにあったと言えよう。

シャイバーン朝のウラマーがサファヴィー朝の呪詛行為を攻撃合法化のための論拠と為した背景には、このような呪詛

を巡る歴史があり、スンナ派にとっては容認しがたい状況が一六世紀の末まで存続していたのである。<sup>16)</sup>

### (3) ウラマーの往復書簡に見るマシユハドのシーア派信仰

それでは、本章のはじめに挙げたシャイバーン朝下のウラマーによるサファヴィー朝シーア派信仰への批判に対し、当時のサファヴィー朝を代表するマシユハドのウラマーは、どのように応えたのであろうか。

レザー廟で二〇年間教鞭をとっていた Rustandari (表2-10) がこの批判に対して反駁を試みた。彼はコーランやハディースを用いて様々なシーア派の論拠を提示し、「シーア派」が不信心者であると主張するスンナ派ウラマーの攻撃に伝えていく。そして最終的に彼は、シーア派が不信心者であることは証明されない、と断言する [Abbas, I: 196-207]。

しかしシャイバーン朝下のウラマーは、「行を放棄し、偉大なる教友たちを誹謗し呪い、さらにはそのような不信心や罪を報酬 (thawab) の誘因と見なしている者たち」 [Abbas, I: 192] と、サファヴィー朝のシーア派教徒のことを規定したように、実際には、シーア派信仰そのものを批判するのではなく、呪詛を行うシーア派教徒を非難したのであった。前節で見たように、呪詛がサファヴィー朝の始めた過激な行為であり、本来の正統なシーア派教義から逸脱する行為であったからであろう。それに対して、正統なアラブのシーア派諸学の伝統の中で学んだと思われる Rustandari は、この呪詛への非難には次のように応えている。

シーア派であることの理解は、……誹謗 (gabb) や呪詛 (lan) が賞賛されているのではなく、三人のカリフの名は絶対にシーアの民の口にはのぼらないと言えよう。彼らの呪詛は義務ではないのである (wajib nist)。もし、シーアの無知な者たちが呪詛の必要性を命じたとしても、彼らの言葉は賞賛されるものではない。それは、スンナの民の無知な者がシーアの殺害の必要性を命じたも、その命令が祖先の思想と子孫の見識に相応しくないと同様である。 [Abbas, I: 203]

この発言からは、彼自身は呪詛行為を決して奨励していたのではないことが明らかであろう。換言すると、Rustandari

のようなマシュハドの一二イマーム派ウラマーの認識としても、「シーア派である」ということと「呪詛を行う」ということとの間には、実は大きな隔たりがあったのである。そして彼にとって、自己の信仰の正当性を主張するための「シーア派」の論拠を詳細に提示することはできようとも、呪詛行為そのものを正当化することは不可能であった。正当化できなかったために、Rustandari は「呪詛は義務ではない (wajib nist)」という表現を使ったのであろうと思われる。逆に、おそらく自分ではたとえそれが異端行為であり、奨励できないものであると認識していても、サファヴィー朝に庇護される立場にある彼は、国内ではそれを黙認し、他方、シャイバーン朝下のスンナ派ウラマーに対しては「義務ではない」という至って消極的な意見を述べなければならなかったのである<sup>⑩</sup>。

このように、呪詛に関しては不十分な返答しかできなかった Rustandari であるが、彼はスンナ派ウラマーに敢えて反駁することによって、ウズベク軍のマシュハド侵攻を防ぎ、聖地を守ろうとした<sup>⑪</sup>。但し、その時彼が守ろうとしたのは、軍人階級であるキジルバールシーとは無関係な「住民」であった。書簡の冒頭で、彼は「キジルバールシーに対して親しみを抱いているわけでもなく、ウズベク族に対して不快感を抱いているわけでもなく」[Abbas, I: 195]と、殊更にキジルバールシー軍との無関係さを強調し、中立を装っているのである。

彼のこのような行動の背景には、それまでのシャイバーン朝の侵攻時の対応が影響していると考えられる。というのも、一六世紀のマシュハドへのウズベク軍による幾度かの侵攻を見ると、一六世紀初頭の Ubayd Allah Khan は、イッシュハド攻撃の際にキジルバールシーを殺害することはあっても、聖地の住民に危害を加えることは一度としてなかった。同時に彼は占領後、レザール廟に参詣し、有力者たちを慰撫していた。また、一五六四年に侵攻した Pir Muhammad Khan は、マシュハドの住民の要請に応じて途中で侵攻を後悔し、レザール廟に奉納を送って帰還している [Khumlat, 442]。このように、それまでのウズベク軍は総じてマシュハドという聖地とキジルバールシーではない住民に対して好意的な場合が多かったのである。

さらに、一五八八年のマシユハド侵攻の直前に行われたヘラート侵攻時には、Abd Allah Khan はヘラートのハーキム、Ali Quli Khan と一旦は和議を締結しようとするが、その意志を変更したという。その理由は、「シール派の残忍な道を選んだキジルバーシユとして知られる不信心者の集団からのホラーサーン解放の必要性」と「トルコマーンによって虐げられた民衆の悲惨な状態の緩和の必要性」であった。<sup>④</sup>すなわちヘラート侵攻の場合、根拠となったのは「キジルバーシユによる圧制」であり、表向きは攻撃対象はキジルバーシユであった。<sup>⑤</sup>この時点まで、ウズベク軍にとって、不信心者であるが故の攻撃対象とは、サファヴィー朝の土台を支えるキジルバーシユ集団であり、住民は攻撃の対象から外れていたのである。

しかし今回の‘Abd Allah Khan 父子のマシユハド攻撃の場合には、ウズベク側のウラマーの書簡からも明らかのように、マシユハドのキジルバーシユと住民の区別は最初から為されていない。その上、書簡によると、彼らはマシユハドを「戦争の家 (dar al-harb)」に属すと断言し [‘Abbas, I: 192]、彼らにとってイマームの墓廟が、もはや聖地として見なされてはいないことを明確にしている。また、彼らはマシユハドのサイドをサイドとは見なしていない。それは以下の言葉から理解されよう。

書き送ってきたところによると、この地の住民は大半が預言者の子孫である、とのことである。思うに、「彼はおまえの家族ではない。彼の所業はよろしくなら」(コーラン一章四六節)という御言葉を彼らは聞いたことがないようである。 [‘Abbas, I: 192]

当時マシユハドのモスクでは、アラブ出身のピーシユ・ナマーズによって呪詛が公言されていたであろう。第二章で見ように、サファヴィー朝と結託するシール派ウラマーの存在は、マシユハドで呪詛が活発化したことを示すにあまりある。「所業がよろしくない」と述べられているのも、呪詛行為を指すと考えられよう。一方で Rustandari のように、呪詛が賞賛されるものではないと思っても、現実の前でそれを黙認した者たちがいたことも事実であるが、しかし、町中での呪詛が黙認されているという事態そのものが、シャイバーン朝にとっては容認されざることであった。彼らは言う。

たとえ一部の者が、「我々はこのような話をしたことがなく、また今後ともしないであろう」と言ったところで、このような戯言を耳にしたにもかかわらず止めなかったことは疑い得ない。それ故、この者たちもまた、彼らと同様となるのである。[Abbas, I: 190-191]

すなわち、率先して行う者だけでなく、それを傍観している者たちも同様に、サファヴィー朝を支持するシーア派教徒であると彼らは見なした。「〜に呪いあれ (Tanat bar:)」という一言により、キジルバシーのみならず、住民もまた、呪詛を行う不信心者として一括され、そして不信心者であるが故に、殺害・略奪の対象として合法と判断されたのである。<sup>②</sup>

その結果、四カ月に及ぶ包囲の後、Abd al-Murmin Khan 率いるウズベク軍は城壁内に突入し、キジルバシー軍をレザー廟に追いつめた後、レザー廟内で容赦なく戦闘を繰り広げた。ウズベク軍襲撃の様子を TAQA は生々しく伝えている。

兵士たちの奮闘も抑圧された者たちの祈りも運命には抗しきれず、ウズベク軍は中庭 (sah) の周囲を包囲し、双方から矢や銃弾が飛び交った。Abd al-Murmin Khān と Dīn Muhammad Sultān は……敷居 (レザー廟) の中庭に入った。キジルバシーのガージーたちは……奮戦したが、一人一人苦難の杯から殉教の酒を味わい、敵の流血の剣により聖なる敷居の中庭には死者が積み上げられた。「ハーキムの」Ummat Khan は武器を身につけた兵士や住民と共に戦ったが、殺害された。ウズベク軍は勇者たちを片づけると、敬虔な者やウラマーやサイイドたちの殺害に取りかかった。[TAQA, 412-413]

最終的に、レザー廟やその付近での死者の数はおよそ五七〇〇人にのぼり [Khulāṣat, 898]、捕虜となった者の中では、二〇〇〇人から三〇〇〇人が殺害された [Maqādat, 373]。さらにウズベク軍はレザー廟の金銀の燭台や宝石や書物をも略奪した。このような虐殺や略奪は三日間続き、三日後、大勢の婦女子が捕虜となって連行された [TAQA, 413-414]。特に、レザー廟に避難していた有力者たち、中でもウラマー層は壊滅的な打撃を受け、最高位にあったウラマーが捕虜となって連行され、長年レザー廟で教鞭をとっていた他のウラマーやムタワッリーやピーシェ・ナマーズが殉教した。殉教を免れ

た者たちをインシヤンドを後にしななければならなかった。

1587年1月、Abd al-Mur'min Khan はインシヤンドを占領した。以後、1598年に、Abd Allah Khan と、Abd al-Mur'min Khan が相次いで亡くなるまで、十年間に互リインシヤンドはシャイムーン朝の支配下に入る。

④ 'Abd Allah Khan の「コー」包囲を論じたものとして、A. Burton, "The Fall of Herat to the Uzbegs in 1588", *Iran* 26 (1988); R. D. McChesney, "The Conquest of Herat 995-6/1587-8: Sources for the Study of Safavid/Qizilbash-Shahid/Uzbek Relations", *Etudes Safavides*, ed. J. Calmard, Paris-Téhéran, 1993 (以下 McChesney 1993 と略記) がある。

⑤ 書簡の内容は、「コー」包圍 (Abd Allah Khan) と「コー」の兵士たちは、このような論拠と証拠 (Gali wa burhan) をもって、神聖なるインシヤンドの包圍とこの地の住民——大半が預言者様の子孫である——の根絶を自らの合法 (halal) とされているのか。人々の生命や財産や耕作地に対して、また、サー朝 (sarkar-i fayd-athar) のワタン物件に対して、略奪や強奪や殺害の手を広げることの是非のべである [Mummin, I: 101]。

⑥ シャイムーン朝のマヌーイーからの書簡と Rustamdarī の書簡は、幾つかの史料に載せられてくるが、その中には 'Abbas, 188-208 を参照した。これらの書簡のより詳細な検討は、他日に期した。

⑦ 呪詛を表す語として、[a'n, la'na] 以外に [sabb] [a'n] [dush-nām] などが用いられる場合もある。サヌマウイー朝の呪詛は、J. Calmard, "Les Rituels et le Pouvoir—l'imposition du shiisme safavide: eulogies et malédictions canoniques", *Etudes Safavides*, ed. J. Calmard, Paris-Téhéran, 1993 が詳しく考察をなしている。

⑧ 天国を約束された十人の教友たちやウマイヤ家・フッムーン朝 [Kutubī, 73]、サヌマウイー朝の敵であるオスマン朝または呪詛の象とされた [Membre, 24, 52]。

⑨ 1530年のシヤームの閱兵式では、キシルムーン朝諸部族など、約1500人の tabarrātī が行進した [Kutubī, 203]。また、tabarrātī が軍營 (urd) の移動時にオスマン朝への呪詛を代わる代わる叫びながら徒歩で先頭を行くこと、シヤームを賞賛すること、町の広場、シヤームの武勇伝を歌にして人々から金をもらっていることなど、Membre は伝えている [Membre, 24, 41, 52]。

イスマーイーーン二世時代の tabarrātī については、R. Stanfield, *Mirza Mahdum Sharif: A 16th Century Sunni Sadr at the Safavid Court*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1992 (以下 Stanfield 1992 と略記) 81-85, 112-118 が詳しい。

これまでのところ、彼らの姿が確認されるのは、ヘラート、タリクス、カズヴァーンである。他の地方都市で彼らが職業集団として存在したかどうかは不明であるが、彼らによって日々カリフたちの呪詛が町中で叫ばれていたのであれば、彼らの存在は呪詛の浸透を進める上で非常に重要であったと言えるであろう。正統なウマイヤ朝の権威のみならず、tabarrātī のような人々の存在の上でサヌマウイー朝シーア派信仰は地盤を築いていったのではなからうか。

⑩ 即位後、イスマーイーールはすべての都市でシヤームたちに二ノートの派の教育を行わせる一方、カリフの呪詛を強制した [Mummin,

口: 234]。このカリフや教友たちを呪詛する政策に対して、特に、ハ  
ラートにおいては、有力者や住民の間で激しい動揺があったことが明  
らかにされている。「久保一九八八、一三七—一四四」。

⑧ Eberhard はオスマン朝下のウラマーによるサファヴィー朝に対す  
る非難として、(1)發通、(2)飲酒、(3)礼拜の不履行、(4)ローランの輕視  
(5)キブラの変更、(6)スンナ派の呪詛、(7)墓の冒瀆、(8)メッカ破壞計  
画、(9)压制、(10)信仰の破壞、(11)神性の主張、などを挙げている [E.  
Eberhard, *Osmantische Polemik gegen die Safawiden im 16. Jahr-  
hundert nach arabischen Handschriften*, Freiburg im Breisgau,  
1970, 84-128]。これらはスンナ派、遊牧部族であるキシルバシーの思  
想傾向を反映した「過激シーア派信仰」あるいは「キシルバシー的  
シーア派信仰」として特徴づけられているのである。

⑨ 本稿第三章註の参照。

⑩ 例えば、シャーン朝の Ubayd Allāh Khān のからの書簡 (一  
五二九—三〇年) では、サファヴィー朝のシーア派信仰の中にも呪詛  
行為のみが批判されている [Fahmās, 32]。Dickson によれば、書  
簡の考察も合わせて参照されたら [Dickson 1958, 180-187]。また、  
オスマン朝のメイマンからの書簡 (一五五四年頃) では、「特に  
[Khusfān] と称して二人のシャーンの呪詛を非難している」 [Fah-  
mās, 201-202]。

⑪ ムガル朝の Humāyūn が一五四四年にサファヴィー朝に亡命した  
時の話である [Bāyazīd Bayāt, *Tadhkirat-i Humāyūn wa Akbar*,  
ed. M. H. Husayn, Calcutta, 1941, 9-10]。ペーキムの弟がインド  
ン下で学んでいた時期は Isfahani (表 3-1) が隠棲して、教導に勤  
しんでいた時に相当する。

⑫ タフマースの呪詛への因執は、Isfahani のサマル職罷免にも現  
れた。彼が罷免された直接の理由は宮廷医師による讒言であったが、

「サドルが罷免された」別の要因は次のようなものである。ミー  
ル (Isfahani) はシャーに「オスマン朝 (rumluyā) のために得策  
として幾日か呪詛 (la'ni) を中止せよ」と上奏した。  
シャーはこの言葉に立腹し、その席 (majlis) で彼を殺そうとし  
た。「シャーは」サイイドたちの取りなしにより思ひ止まったが、  
二度と彼と関わりなかつた [Kinā'at, 263]。

⑬ とあるように、オスマン朝との関係が悪化して去る当時に、サドルが  
呪詛の中止を申し出たことがタフマースの立腹の原因となったのであ  
る。Beeson は Isfahani 罷免の一因であったこの点について全  
く触れていない [Beeson 1982, 97]。

⑭ イスマーイール二世の信仰及び彼の政策によるカズヴァーンや宮廷  
への混乱等に関し、W. Hinz, "Schah Esma'il II: Ein Beitrag  
zur Geschichte der Safawiden", *Mitteilung des Seminars für  
Orientalische Sprachen* 36 (1933) 76-85; Stanfield 1992, 95-118 を  
参照された。

⑮ この名前前の字は Mir Sayyid Husayn が、al-Karaki の娘の  
子であり、アルダビールのシャーンル・イスマームを務めたミハタ  
ドの地位に就いた [Zāda, 145, 458]。また Mir Sayyid 'Ali Asta-  
rābādī 及 Sulzani の著者の祖先でもある。この事件はよく「Sayyid  
'Ali Mafizh」として有名になった [Zāda, 150]。

⑯ イスマーイール二世の死後、カズヴァーンでは呪詛中止政策の崩  
壊された tabarrāt たが、呪詛中止の張本人である Sharifi が攻  
て暴動を起している [Stanfield 1992, 116-117]。

⑰ 今後ならぬ検討を要するが、後世の呪詛を通じて発言するた、呪詛  
はサファヴィー朝下で存続し、十七世紀末のイランではあらゆる機会  
や礼拜時に呪詛が叫ばれ、人口に膾炙していったであろう。但し、この  
呪詛の対象はワマルに限定されている [Kämpfer, 35, 36, 177]。

①⑦ Rustandari は、別の箇所で「二人のシャイフの誹謗は不信心である」というハディースを捏造されたものと見なし、深く論ずることなく切り捨てている [Abbas, I: 205]。

①⑧ 彼は、ウラマーの役割は君主の怒りを鎮めることであり、それを煽ることではない、と述べ、ウズベク側のウラマーの態度を非難している [Abbas, I: 206-207]。

①⑨ McChesney 1993, 84, さらに「ホラーサーン遠征は「シャリーアを放棄したキジルバシーンに対する個人々の絶対的義務 (Farḍ 'ayn)」と位置づけられており」 [McChesney 1993, 82]、ウズベク側の法学者たちはキジルバシーンを不信心者と見なすファトワを発行したという [McChesney 1993, 92]。

②⑩ 実際には征服後、キジルバシーンのみならず、大勢の「タージーク (Tajik)」もキジルバシーンと信仰を同じくしたことを理由に殺害され、「シーア派狩り (Tafdi kushan)」が横行した [TA44, 389-389]。

## おわりに

一六世紀のマシユハドのシーア派化は、第一に、サファヴィー朝という新たなシーア派政権による他都市には類例を見ない程の軍事的・経済的庇護政策、第二に、この政権の庇護下に国内外から移住し、有力者の一翼を担った一二イマーム派シーア派ウラマーの存在に拠るものであった。しかしながら、王朝とウラマーの双方によってシーア派信仰が強化されたマシユハドでは、一六世紀末に、サファヴィー朝シーア派信仰の基調を為す呪詛を攻撃合法化の論拠としたウズベク軍により、躊躇いもなく住民が虐殺され、レザール廟も略奪されるというマシユハド史上未曾有の大惨事を招いたのであった。本稿で扱ったマシユハドは、イランにおけるシーア派化を論ずるための事例としては特異にすぎるかもしれない。しか

②⑪ かつて Ibn Ruzbihan は、キジルバシーンを非難する際に、呪詛を論拠とした「久保一九八八、一四三」。半世紀を経てモシャイバシーン朝下のウラマーの主張に変化は見られず、非難の対象がキジルバシーンから住民へと拡大されたのみである。このようなウズベク側の認識は、逆に、当時のマシユハドにおいて呪詛がキジルバシーンから住民へと広まっていた証左となろう。

②⑫ ウズベク軍突入のきっかけはマシユハドの民衆であった。一部の民衆は食糧難の事態に耐えきれず、またレザール廟の財産を横領する当時のハーキムに対する嫌悪感から塔の下に穴を開けた [Khalidat, 897]。この事実から、民衆レヴェルではサファヴィー朝の支配が根付いていなかった可能性を指摘し得る。これは民衆と有力者層の政権との距離の違いではなからうか。

②⑬ このウズベク軍の虐殺行為は後世語り継がれていく中で、住民の三分の二が殺害されたと言われるほどになる [Matta, 41]。これは明らかに誇張であろうが、当時の侵攻の激しさをも伝えている。



し、マシュハドの事例から明らかにになったように、広くサファヴィー朝下のイランでは、王朝側から優遇されたサイイドやシーア派ウラマーによってシーア派化が促進されたと考えられる。特に、シーア派ウラマーは王朝の庇護と引き替えに、王朝の思想を普及し、教化し、擁護するという役目を担っており、一七世紀半ばのシャー・サファイー（在位一六二九―一六四二）以降、宮廷に集まる彼らによって政治が動かされる程、その影響力は強くなる。

一方で、成立当初は数々の点で非難され、その信奉者が支配階級のキジルバーシュに限定されていたサファヴィー朝シーア派信仰は、一六世紀の間に、呪詛行為に収斂されるようになった。そして、「くに呪いあれ」という単純な行為であるこの呪詛行為が、マシュハドの場合で明らかになったように、スンナ派からの激しい攻撃対象となる危険性をはらんでいた。しかしながら、見方を変えると、呪詛は、その単純さの故にサファヴィー朝下の住民のシーア派化に寄与したと言えるのではなからうか。

今後、他都市のシーア派化とその状況、及びシーア派化に際してシーア派ウラマーの果たした役割をより広範に検討しなければならないまい。それによって初めて、イランのシーア派化と現代見られるウラマー政治の基礎を作り上げた一六世紀のサファヴィー朝下のイラン内部の状況が明らかになることであろう。

（京都大学大学院生

The Mausoleum City of Mashhad-i Muqaddas  
under Şafavid Rule

by

MORIKAWA Tomoko

Shāh Ismā'īl I established the Şafavid dynasty in 1501 and, in the process, imposed shī'ism on Iran. Although this act was of epochal importance, subjects such as the Şafavid state, its influence on Iran and the impact of Iran's conversion to shī'ism have not been fully studied as yet. The influence of the Şafavid state and shī'ism is best revealed through an examination of the "mausoleum city" of Mashhad.

Shāh Ṭahmāsp patronized Mashhad, in particular, the mausoleum of Imām Riḍā. He appointed a favored nephew, Sulṭān Ibrāhīm Mīrzā, to the governorship of Mashhad and made shī'ite sayyids the *mutawallī* of the mausoleum. Ṭahmāsp clearly intended to make Mashhad the symbolic center of his state and the most important shī'i city in Iran. As a result of his patronage, many shī'ite 'ulamā' immigrated to Mashhad and forged powerful communities which promoted the further dissemination of shī'ism within the city.

In 1589, Mashhad was devastated by a sunnite Uzbek attack. The rationale for the Uzbek destruction of the city was that the shī'ite creed of the Şafavids was heretical, based on the curse of the First Three Caliphs. Not only did the curse which was hardly approved by the believers of twelve Imāmī, an orthodox creed, help legitimate the Uzbek actions, but the close ties of Mashhad's 'ulamā' to the Şafavids led to their downfall. Because the 'ulamā' of Mashhad had relied upon the protection of the Şafavids in their struggle with the Uzbeks, they were slaughtered along with the Qizilbāsh garrison when Mashhad was sacked.